輿人
南漂記
五巻合冊

外交

寛政六年
安南漂流記

2906

南漂記巻之一

漂流

ここに寛政六のとし寅八月廿三日陸奥牡鹿の郡石の巻といへる湊より纜を解き同廿八日[illegible]湊へ着き次の月廿七日午の刻頃風にまかせ北風にて登り其夜も同じ風に帆を張り廿九日は昼夜共に南風に吹かはり卅日の又八ツ時ころより又そろそろと小風吹起し申の刻よりは大雨風車軸をくだしはげしき汐浪は船上にゆりあげ四方は真黒闇のごとく悪風ますます

強く吹来の艫を押ち舵を折檣小舩までも打流し
十六人の者ハ汗水になり命限り根かぎりに働ども只吹
まくりて再び挽かへせひなく帆柱を切大風に汐浪に
逆巻よりめくかくごを極覚かまへられさる内夜もあけ
たる朝きしがますます風ハ劇しく又東風となりてく
げしさてハいかんともなし乗組船君を初て方角を考
つるまもなく大風に吹まくされ風下へ流よりて
日の九ッ時ニ向ふに八丈が島のごとくなる所を見付舵
づかを極ふ立帆をよげ綱を武蔵に仕かけ右に當

と目當にむかひけるといへども風も次第に猶さかんになり汐浪
逆立鳴りてそれよりかつかく丈よりハ昼夜のわかちもなく
十六人の者ども命かぎり運を天に任せいづくともいふあて
どもなく毎日吹風を戌亥とのミいふ丑寅又ハ巳午
ともおりふ内に未申へ吹まハし気力勢気もつかれなくて
漸十月廿日頃より子丑風に吹変り天気快晴に
なり風も静りしが霜月二日までハ呑水をきらし
一同の渇ひなく飯を焚てハたべどもなれど神佛へ
祈願をふせどもかしけれど風あるだろう雨とてハ降らせ

ひるく生米をうみ日を送りし乃間咽よりハけむりの
ごとくの息出でゝせつなさにて焦熱の苦しミも部あら
んとおもハれて只泣かなしミくらしが七日までハ辛き
命をつなぎけり実や今一日をも水なくてハ叶ひがたくその
夜九ツ時よ十六人とも髪を切て神宮へ立願の卩上雨乞祈
誓御神の恵を出て明る八日暁がたより空うち曇り
すまでたちも大雨頻に降つゞき手桶手桶たらい鍋釜
まであるまで天水をとり盃おしなべ人々心地よろこび神
の納受の有がたくめいめい身を清めて神宮を伏拝み渇を

凌ぎ喘息を休めけるとぞや石の巻をいでしより日数
かぞへ見れバ九八十日だらりまかり流浪身にていたる也一
つあけくれやう仔細を申しふなばかり只明しくらし浪に
漂ひし日数十日も山を見ず涙を誠に世界の大灘まで夜を
見かしこを跡でも知もらなきハ浦をとふく空を見る然
安しれし日をおくる其内に天水多く呑し迚や十
六人とも不残面体手足まで腫ふくれ腹まで次第に張
満て目ハみえなく我もくもくと指を以て手足を押せバ
壺すつても深くゆびの跡つくまでなりぬるとぞ至て更く

けふまで命の限りなるがあすハ藻屑とならんなれば迚も死を
つぎ約束なればいづくの浦へなりとも尋つきて生死の
程を定めよと旅籠料ハおよびなくとも吉神宮の御加
護にて人里へよせ玉へと神楽を捧げ所縁に祈りの詣
助なく霜月十七日明方朝日と共に一里ばかり未申の
方にあたり小さき嶋山を見つけし此嶋へとさし行なく
詣ぎるにまで漕寄せけるが是迄だんだんの難風にて船の
上廻ち崩て又すすずもゆるぎ用意の苫も縄なく
ことあきを掛け此辺までハ来りしに纔か水七八尺ならんど

帆も切れかや舩も思ふごとく此まハいかゞせんと先十六人とも
艪櫂下ろして陸より嶋の小高き山ぬかり四方八面目のぼり
たけ見まわせど村里漁辺もなくハ只青くして海乃
表時ハ十一月の始なれ日ハ西山に傾きて冬の夜風の吹だ
ろう我人ハ身を心も労尽きてむなしき旅人の身ならる
てもふくよりなく只手を合せ後ろも仏の外絶ゆるも
ふくとろわけ十三才の小童まで六十有余の老人有ほだ
手に手をとれハかなしく此嶋をしなるとしおもいへバかなしき
やるすべなく外ともふく艱ともなく一夜ハ岩に臥しけるが

西山小村

明ればハ霜月廿一日天気朗らかに時候よりはあたゝかにて
雲霧のさはりもなく陸奥などの気候とは大ひにちがひ
し揚子山へ来て南海のはてをみわたしてしばらくおもひ
をはらし四方を見渡しても海上に塵一本も見えざればいと広く
此辺のことは赤土の泥海までいくすぢともなくかぎりなく見渡し
を着く食事をなし居たるが水夫の内源三郎なる者に
指さし海上遥にみゆるは島にてはなきやといふ
我もくしく延上りて目よりも見渡せば小さき船

掉さしてくるさの方へよせくる船此時の様は急しく又
語りけるは丈よりだんくに三四町も近づき只今手を上げ
て十六人とも助け呉よと呼はるはのしるきぞ
次第に近付くは半町斗向ふまで漕寄たるに能く見れ
ば招しは十六人とも髪をおろしたる面体にて
見ぬくき上姿の見苦しきさまや寄せ来るをは俄に
見たる引返さんとて艪をおし出さんとせしにまた
紙よ隠し置きて手旗をふるくさしおいてとらぬげならぬ手
を合せ泣かなしむの真似をせし出に御合図せし揚子

まで行かく江戸へござ寄せ崎へよりけるが日本人とハ違ひ
髪まで髭なく小さくしかて髪を中ぞりし揚巻
にく似よく人無免本頭清蔵ハ病氣に源三郎右衛門船
の人へ難ぎ船の次第を語り助けられてお礼とい一ッ
を呉れ申け故よ文字まで何國と尋ぬるに安南國西
山離宮と云へる所より方達ハ何國と問へ日本と書
見せるハ目下かしと問日下私ハ日本と書
ことを病人まで何華助居を書き見せるハ承知の
陸仕船まで居丈より十六人とも小舟に乗せ行海上何里

なくりしおかり安南家数廿新年前小淺へ私とつゞき五六武
人と此方より一通渡し三人も陸へより何其へか行けるが
まさく難く存じ候折角人里へハ來れども日本の
地にてハなく幾千里の波路を越え唐人ども多く陸地見
世物など売渡しるなどせるじやとさまぐの事おもひ
又ハ猫ども此三人の傍へ来るをなやくしお詫因此所の官
人とも加る籠よ乗せ人々多人ずつ引連れ八人ハ出行
まで官せんの三人も傍の上官人ふ来て一寿ずつ内ふ頭一人
よりて下書附見せ人々源三郎五兵衛ハ委細よ尋ねて付

日本船にて漂流の次第難風にて破船の様子十六人の内
一人宰主病気のしらませて書附をもつて何卒御助下さ
れと猶丁寧に願けれバ少しもさからはず殊の外宜敷ござん
なり此辺の国王へも申上まづ病人ハ此船の世話に籠
此時始て安堵いたし今一人の病人ハ死して十四人つゝがなく
手をとりて官人の案内にて陸へ上り左右をとりまき響
凡茫茫子西瓜沢山に出来有梅なども多く実のり左側に
藪あり竹の子などもたくさんにあつて暖国とみえて霜月
下旬なれども寒気のさらにかつてなし日本にて月比の気

候にて甚だ平気にて扨其程中所より行て凡間に二三尺
の明家あり此内へ案内してそこに入られ木の葉のこはくて色り
なるさと上座をとりしき座にて上官ハ何者か少し其人品人物つきさ
添こそきより諸々の書付をもつて右筆へ書しまいらせさゞく弁
申に翻訳と志のぎ凡九十日目に此所に来り十六人ともに無
事なるを悦びりよと云はる内時刻を七つ時まで下官食
事なとぶしとて茶碗にかゆをもり瓜などび梅菜の漬物
をそへ難風にて漂ひ身も心も疲労せ有でしいかゞ今日ハ
かゆをたべてよく出船をりつて丁寧にいとぞ御いたゞき

是も亦とかく度に上落つき甚廿二日よりハ米の飯ハ日本（但し米ハ日本）
麪類のごとくにて風味あしく菜ハ茄子瓜梅菜せり芹子
せんべいのごとくにて蕎麦のあじハなし
等の塩漬なり魚ハ鯵さば川魚多し
獣ハ猪牛を食とす鳥ハ鴨鶏鶩あり一説ハ塩漬乃鳥
物多くハ魚肉猪の料理にかしてこの心漁節ハ
按ずるに其日より何程も里数ハ分らず川で
國政のよろしきを不と思此地に十二月
十五日まで逗留の内隣家に八十ばかりの翁あり日々杖を
つき來り廿日ばかりの別深に海山の情をのべ涙く王城へ

送り尋ね日本一路の恥ひと袖をぬらし
此出船のせつハ杖をつき二三町も送り来り涙を流し
別を惜みける老人の真実未に猶よせ跡にて感じ侍りぬ
十二月十五日王城の官人并に医者通詞等川舟に乗
此川舟より王城へ翌日官人を王城より
同船にて乗入十二月
廿日王城川口に着ける

風土

高山雲に聳へて樹木多く水清くして大川あり海三

方に巡りて阿蘭陀廣東阿媽港船其外諸国の商船ここに碇をおろし交易繁昌の地にて漁村浜にあれば猟師山を稼ぐる鶏数多市にならべ川魚沢山にありて海魚には赤鱏多し青物年中畑に熟し大麦小本草を始め食用を助け竹のふしあへ未曽有の物じ金銀銅沢山にして銅を廣東より渡す八本年に三度熟し大豆小豆是に同じ下穢に気候の煩なく国風実気ありて情深し国王仁政を厚くし民をたく砦の陰りなく只南海の果にて流るに不

時に合戦の備へ怠ることなし平生軍器の調練怠りなく去る景興五十四年四月より西山国王城に攻むき征伐始るといへども未勝敗わからず当時において船軍の用に頻りにしてこれ破損一艘しれず八巻の末に記せり

南漂記巻之一終

南漂記巻之二

安南王都

交趾　東京　外羅　儀安

尖筆羅　布政　鎮州

安南國

此辺遠にて安南国と号くなり

総し安南王城を交趾といへる百里余もはなれ交趾に

日本町といふて昔日本人住居せし町今にあるよし

此外安南の島国あまたあり　北極出地十五度十

六度の下もあり

福田文庫

王城

西ハ南ハ高山　東ハ海へ續ける大川あり此川西山村へつゞけり

北ハ城下町也　艮百里ハ西山国有但し舟路三日又陸一時ハ六里

ヾ行一日三十六里ほど日本の積之西山村とハ別く

四方十二町石垣堀仕掛なし東ハ海へ續ける大河也城中

地形次第ニ高し内ハ五重塔立凡二十丈斗　（但し清朝の画ニも）

五重塔城内城　外ニ不詳有　甚見事なり　（城中の地形追く奥へ丈ニつくれり）

又ハ坤ニ當り至く暖ニなり　（四季とも花草あり冬入なし）　土地日本よ

年中瓜茄子西瓜梅竹子密柑橙あり日月長短ニ　（極暑寒中より下謀多也）

遠ひなしといへど日本の暦と潤月など同じ事なり

大清廣東州と安南国とハ舟路又十日も安南国南ニつゞくまたある国有其土と廣

東までハ潤月日本とハ二三ヶ月のちがひあり凡又十日舟路一昼夜ニて日本ニ及

七十里あまりの積りなり乱彼ハちがいれ

遠ひあり日月の廻り潤月なども同じ事也　于時景興五十五年十二月廿日　（寛政六寅年ニ當ル安南国年号也）

西山小村より川口まで艮の川口ニ為丈より一町ばかり

まで城下入口也入口ニ門有　又大道ニ小石たゞいつも砂地也

一町ごとに門有此所ニ城見張の　（門ハ至て厳重也）　家造ハ屋葺一郭をなし

のこらず屋根を路にて又カチヤンといふものにてふくなり

武家奥ニ至　極ハ三丈斗のたかさ丸太をつくる塀までも路にてカチヤ

ンと綱ニ結ひ商人店ハ両側ニ立續ケ日本ニ少しもかわらぬ

ところもあり城下ハ日本東都程も左道筋にも国騎馬ニ三人

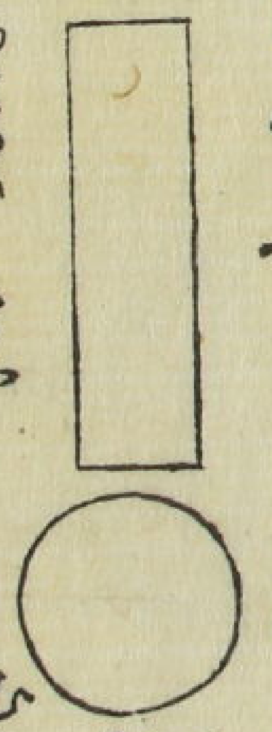
中官十人下官廿人雑兵加る能人足まる六十人都合百人

だゞ十六人の者のこらず船まで行るゝよふ場より九
卅町斗の間見物人山のごとく別て近くハ押あひ群集
せりそれより王城の外郭より六町斗ゆきおもて番つき制
公所を旅宿ニ渡し下され甚だこゝちよく掃除いたし間ハ三
間斗奥行七八間ほど二階もあり裏も広く諸ニ商人町
故張役所より官人来り料理方を申されし給物まで
ふきさめまづ公所まで十六人ともに少しハ安堵いたし甚
表ハ心落しらや皆く前後もしらさまへど打臥り
其日より下官二人小童一人ツヽ付添あり翌廿一日ニ官人まで

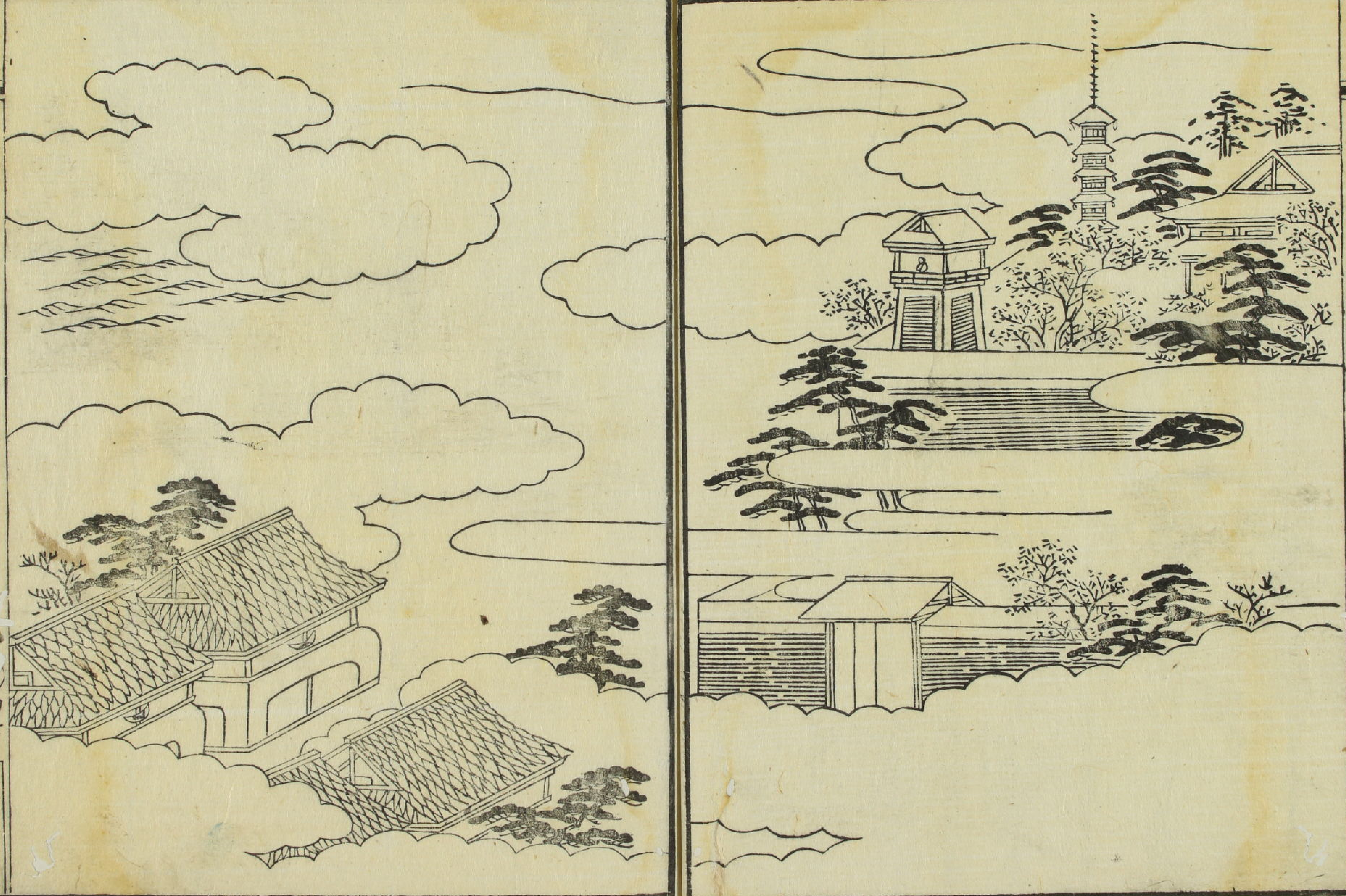
らを退て国王へ御目見へ致させべきよし何角不自由
なき様にとて為用五貫文白米弐俵國王より下さるゝなく
兼又何まても下官人へ云ふ事を其用度申べく挨拶いた
しゆへしなり 此所まても未詞通じかね申候へ共文字にて相通り候故此はし文字も志かくかくと書く
首人弐三人より右中様条の本あり先ずそれよりくへの奥まくりし 右頭清蔵をはじめ外十六人
と西山へ泊宿まへよりの病気をくずれすこぶるくに種漏の
ようとまて日々食物も不動よふにしたいせつふりん一ツよ
つき下官人をおれ上官へ頼ありひ服薬致させくれ書
身にして称一あるもく国王よりのこし御目見へ伺也

つけるに出島へ来りまさき番人二人も宿に帰し並十日
人は船飾まで 右船飾八下の方川紙して墓の如く組合せしものなり うしとろ両の釣おせあり四方に柱を立て下に幕を ひきまはし中ごし出入口を設まで甚くのごときなめらかなるのあしよまきばなし堤あり 官人同じふし芝居内
初より勝手にずる節両側迄の見物群集して拝を
ゆけるに程なく王城の表門の前にまゐりかでとあり
是より官人につき従ひ内曲輪まで右左とも家中屋敷
厳重にして一筋の門の上に三ヶ月なりの額に似る
ものあり ダハイモウト云ふ公所 凡そ格式なるあり 公所をとぐるぐると三町斗も
ひまでん表門より地形ある事一町斗也内郭の入口

遠見臺ありて高さ凡十間ばかりあり平生官人上に
あがりて海上を望みる要害の備へ也官人守日かはり
これを勤む也又少し右の方に二町四面ばかりの屋敷あり
天下の薬部屋にて大勢の人数にて薬を採て薬を刻み或は薬
研にておろし 但し薬研は庭の前に 日本の通りなり 薬蔵又作事所なる
干場もあり何によらず刻方



形のおとし
ありて大きなる公所をとる内郭へ通るに向ふに本丸有
公間下は切石にて天井多く両側にらしつけあり凡一町
斗も有べし天井并に両側とも朱塗にくあかくに金銀



どちらをながめ結構なるにて目を驚かせりこしけれのこうす
はりをめあり極彩色の模様なども金銀を入られ高欄のふち
持せあり是も国々より相詰る諸侯方の勝手の宝安置
せられる位高官君人方町人にいたるまで家々に纏をうけ
意対又酒飯を調ふことしゆけなり禮義正しき挨拶
などすることは一生に至らぬまで双方側により拝をしあるて三獻之
手をさげて頭をかゞめてあるなどは一切なし又代郎下九ツ十
間斗左波戸ミに坐り居たりし本丸の正面へ立付く不一間
三間ばかりとなるとき官人十四人を相つさせ警あり別に

一段高き正面に金銀瑪瑙をちりばめし床まで高欄
つきの座をうけ其国王おはしまし右左には王子方あまたつらなりけるに
其中に國王御年四十歳ばかり装束は黒き紗綾
黒き緞子のゴンをきたまひ一王冠をいたゞき袖は小童後に持
たせあるまゝ黒き織物の文人斗を其髪は人斗いづる緒に
て頭を包髪のまげに金のくしをさしたまふ西王子も黒き
装束なりかしらに銀のくしをさし左右の官人のうち細
き紐をつけ青黄赤白の絹をかしらに巻き後ろに垂れ年
一角のくしをさしまだらぐと相詰める其装束は国王

弟に王子の外ハ一人もなし王子兄君ハ二十歳ばかりにて
器量人にて位高くましましたれどもしかし帰帆の國々にても此
王子のごとき器量人まれなり　楊通辞官人（此国儒学者にて通辞をもかぬる）国王の前に於て
音声にて通じがたし此通辞南京人にて去年より
年を重ね通詞をなし船中の後安南国に住せるなり
なりし三度辞を述べし深く悲の日本人は目見へて披露され
ば国王は今般ありて本国帰帆の願ひ甚心殺にて程日本人は
辰し下され通詞をもつて仰渡されしは病人にても今日より
米穀を得られて船到は已に官人宛国にまで外郭へ出十
日人ハ留まる事又其十年の刻を以宿所へ通ひ帰りける

詞解

一（モウハイ）二（ハア）三（ホン）四（ナウ）五（サヲ）六（ワイ）七（タス）八（セン）九（モイ）十（モウラン）百（モウクワン）一貫

御燈明　油　紙　扇子　鉢巻

股引　一重帯　米　喜世留

田葉粉　枕　筆　墨　硯

水　湯　給物　船　手拭　庖丁

髪櫛差事　両親　男親　女親　兄

姉　女房　子　頭　眼　口

歯　眉毛　耳　鼻　舌　茶碗

飯　弓　火　鍋　釜　鉡

笠　灰吹　火入　舟頭　敗布　いや

せつなん　杓　鷲　藥　猫

馬　綿切　明日　雨　蚊帳　灯提

鳩　鳶　鶏　傘　大豆　小豆

男　女　茶　欒梡　日月　ござるい

物を調る事　日本の事をかと云なり

右安南国詞あまた数多き右おしむかるくに記となり
始代迄一具なりし時水主の内源三郎ハおしく文字もあるもの
右日本らろくの外をとりてし詞をたつね書留て右に初より
あらしつて是迄詞をつくり尚々あまたなるて文字まて写置
となせしなり源三郎日本の地へ帰りのち右果数を云事も速

旅宿

十二月廿八日国王へことゞまるべく月見へお滞其上ぬき
帆の類も皆とりあげ有皆く悦び手紙宿所へ属り駕籠
よりいつもは警固の官人前されて一揆按ありて海り
戸ざされ是時刻をよめども定抜よるふうしゆ字ず
しなく支度をなして後殿中の出勤宿まのうちし二人の通人
つも其所少年に日本へ帆の事をいはするふし合具日の
本の引くを遠謀し今般よりの御祝ひよめでたく安寛
ぎ一睡の眠を催しけりとふさる間年改月のせまりしかく

典官舟添人等ゆるしおかれる故に雨を覚して水ふとつく
ば朝夕飯のこしらへでもせんにまゝの丈六を組み又は膝に成
おる食事なきを折して表に国人大勢立ち尽くを眺め在し
がどやくしくにて十人内へそいひまへうしろふ立ところ
にくまあやつりける也何のなるやと好箸をとりにて公国食す
なまでに箸まてくさに中よりよのくきさじくに下ざまのものはてづみまで食
ましるのは皆それ始よりちよしを合せしるのくまとまたを組むと
かめ話りいしるとふしぎに典官と呼人は是は遊女のまどの
存ようし汁に熱くし又箸まで給わりさせ候
おもしくおもひ見物くるくるあるとて典官右の大勢を志

うま退屈といへども多人数にてさらにかくさき出小三良など強
元着出火に裁前までたくつぶしたなせし出火人をやれはよ腕を縮
おあけ屋へつきころせば　但し出火人肉食なせし水土のうけんをや玉で力なし小吉郎のへつんるりまつきたやしは
此節ひよかしらへ人を集まるといへども占ひやくとして食事
もでき次第出官より唐人へ申きつけ役とはなかなか人ま
いくさ二三人も引とし廿枚でも相申され退すれさりまし
より皆く出火人まげかかけたる能く食を穏め此後はかようなる狼
藉も有数三度の支度時よれは三千人迄十人でも裏より見物
いたし居申てたびたびのするり患て西山より通留又此館へ

来りそて三度の朝夕の飯たきくとしてあじふかく日本のこと
らどよりもふあじなき者は　但し豆腐の折ふし男の食事をなさかゆのつくく
ころに米を洗ひ瀬戸物の釜へ　此釜は瀬戸物一切なし何ようなる溜まりを鋳すでも焼おなき猶るい
一切なし湯を入るをもせとあ水を入程なく吹よろしくせるのこと初め
なれ又めるあるは一切なし
しのねだろうしゆゑとられさて焼は飯ふしんよ存ぜけれ
当国にて年中朝夕のさまたるなく米三度づつ実の日本
まで志としきと広東堺より南京じのはや子の肉食多くさ
とち云論にて米の甘だとて焼くては米つよく短命のよし此
地何れとても此通りとさく国風なることをかんじ入るを

野菜魚肉何にても自由なれバあしくハ赤鱏川魚
青物るいを食し獣るいハ随分給ふさバ於く御所へ
拾らそ之貴ハまんぢうなとなく食させしいつでも薄酒一切な
さしまても何にてそのうちと塩梅よろしく手中へ斗の油
あの油を入れ焼は魚など其の種は皆く合の月日
うつれハあくるハ淡泊に美味し旅行して五とかわるとしふ
ども只古ゑるやうしく使用かしぐこまても水去気候の
違ひつつや胃も宜く格あるりまで手中数帳を給事
なし極暑にても夏は清々さるゆはやしくもあつた代國

暖炉火家ごとにありてそれゆゑ火木の其のなるそ公方ど
も禁宿ハ家門あり中より以下ハ居家も其門窓
まへの屋根ひとも有ずしして歩行するもののをし
屋も一月より十四五日ごとも降しふるを雨なく冬五斗
なり傘ハまさき紙なく張椰子の油をぬり骨ハ細き竹ゟ
てしらく日本に類るもなし油ゝ紙何にてしらぬ紙なるや
こまさる事珍敷下駄ハあれど木にてやがんの形よ似
たるの生へやえるも皆のごとし玉人大方ハ跣足にて
多し十四人の者ハわらをもてひきつるを縫つきたるを

ることいをたいよふしんよ於て又旅宿并所の若き男抔
能笑へざりをつくり悦びしもあり又家々に灯燈ハ
すりかけあんどうなりふり羅のあぶら椰子の油をともし
頭へつけるをおけにぬるも皆椰子の油を用ゆ 但し海のやし有別なり
剃刀櫛なとハ大概日本じ事し男女とも檳榔の実を菓子
のごとく食する也歯ハ加様とうけしごとく黒くして
婚姻ハまたし時ハ髪の梳子着物のまでまで男女と
も同じ事なりて 檳榔の実と金麻づくりに包み食するなり 見ワけがたく後よ至
よくようあらし男ハ足の踵の黒き人沢山よありしも

志ごひよりハ此地金銭米穀潤沢なる国ならねど日用之
所の硯石といふもの一切なし中分以上官人家にハ大瀬
戸物まさハ茶碗四種のうけにて墨を擦まじひ中より以下
ハ足のうらびきにて墨をする手紙なども去く故よ書籍ともなし
の黒き人殊によ多し髪もぬらのれ小くも小児のあさ
髪し出家斗なり扨て二月二日たち十二月廿日新国王よ
り渡役下され候豚一疋此斗一疋 但し小太のとじ 鶏二羽茄子丸煮蕎
右六品是ハ大世日の祝儀よ於遥ハ此地遥滋中別段よ小
遥務十貫文十五貫文ツゝ無く官所より渡され候沢山なれ

ぐひ又日数ね立ぬてよりハ典官并ニ下官も所々引まわ
しめぐくさきんじよらくし通辞とも心易き人ニて我方
へも咄又ハ批をも注文同にいたし書物なども読めよまし
アさ候ハのそれしとおかしく内日本へ外国より漂着のもの
ハ王へ目見への義も叶と覚くよりも其義ハ不相成とのみハ
外国よりても漂流人来りく皆国王へ目見へハ叶ハざるに
も甚え速ハ日本の人なる故ニ目見へ出来くよし彼方
是ほど有な縁く古心のことをおもひ出し一日を暮らすりと
三秋のおもひとふし時の来るをお待く内此年ハ京與ハ五

十六年正月ニなりて我国の寛政七年卯の年にて父母妻子のこと
らおもひの事ども思ひ交てその日をくらし居りしも猶更頭痛
気をおこし終に六人の者ども中より病気にて此節ハ食事も
すゝまず追々積気多く小便も通じかね国王より薬附
典薬もいろく死剤に肝膽を砕きくすりをあたへいへども其
の功なく日々容体あしく相成菜さへも咽を通らず医者ハ見
ず後背中足を揉んでやる斗也容体ハ無事に認め出を
ぬ会にせうにて薬をくじ紙袋に入てつるしおり めいくも種々
に心をつけ身を抱に腕を痛め何年一度本復させおそろ
ひ目出度日本の地へ帰帆なさバ此上の悦びなしと語るの十

んぢ六人の罪人と極つきまゐらする時も側をはなるゝ事なく神
佛へハ祈誓をかけ願ひしかども命数の限りなれバ御後
六十日に六人の罪人ハともに果ける誠に生者必滅と
ハ云ながらあぢきなき世の中なるに是非の世とぞかゝる憂
きのごとく今見のよふにおもはれし者も心細く
行末の事案じ暮し淡泊を尋ねかたさ月日を送り
けりとかくれけ六人の内に六十に年よりし父母のあるも
ありて幼き子の母ハ死りせく貧しき一家ハ孤けまする
身ハ此節の世となりて父母一人子一人まで外に頼むべき方乃
なきもありさまども浮世のならひとてなきかつてこそありけり
あはれなれば官人の差図にまかせ永長寺といふ寺に六人を
ともにたびく不葬しけり

永長寺

王城乾の方一里半ばかりにして永長寺ハ禅宗にて国王
の菩提所なり當時の住持法雨和尚ハ古稀のよはひにも
見へ甚だ殊勝なる禅師なり寺ハ方二町ばかりにて寺
中も門を始め境内にハ松杉柏楠欝蒼し群鳥集り

本堂へ並び方丈輪蔵有一切經蔵あり辰巳隅に俗家奉小へ續
て寮あり本堂の後に座禅堂あり佛殿の正面に本尊觀
音金佛にて左右獅子あり佛殿の外に国王代々の位牌
あり又南の方に南寺開山よりの繪像とうけ別間に如
意輪觀音の御厨子あり法雨和尚認られし觀音の写奥に
掛る人の漂流人お果なる時日も同じころにて時く王
城官人へ屆け永長寺へ葬礼なせし右和助ハいつも通
街道なり官人より法の通り葬礼式さし図にて尚
官人も上下二三十人宛も出役致させ致されし十人のものハ

いづれも供をなせしが寺出るまで大方町續なく
葬礼通くせるハ老若男女家々より出で棺を拝み
涙をこぼし我一しに線香焼香菓子数を持右の棺
を我々一送りとしたなく群集なるの去路よのべにし
程なく永長寺の門内へ入バ棺衣の僧よ六人案内して本
堂へかきよせ法雨和尚出座あれバ因音に法經をじま
了良時うつり法經済ぎて本尊まで念仏ありて後方丈
後の方乃墓所へ男三人にてかつげ行棺を其所へ葬るなり
但し棺ハ桧栗などにて厚さ三寸斗も在木なりそれよりアリマ去られ内所
丁寧にけづり四方よチヤンを流し引く作納め二人三人にてかつげゆくなり

かの六人の戒名永代寺に於て至心郎
つもおろかならし哀なるゆきてどもなり

如意輪観世音菩薩　小児をいだき給ふ
但し水のうへに蓮のはの上に居り給ふ

幅壱尺五寸唐紙
一枚紙表具なり

偈曰
不去不離
非去非來
只是相相
猶也功歸

甲寅季仲
仲月吉日
沐筆

永長寺住持法雨普供流通

如幻行人道隆敬刻

女商人

國風として伏見にて女あきなしく諸商ひのかけあるき十に九ツ女よく勤るなり男は只ぶらぶらとして酒をのみ小謡をうたひ三味線琵琶小弓をなぐさみとし商賣は余所にしたるもの多くして遊びあるく高知の風景之城下に七所八所の市場あり此所を新地といふ四方は高堀にて中は壱町斗も一日かしの小屋のごとく建つゞきし店あり毎朝毎日より昼るまで身業の品を銭もくして取よの世をふたる人皆よ菌ひ客のもし店へ銭一とるなべなく賣るへの徳なる事は目覚しきことにいふぞろゑし賣買とも男どもはなく皆女斗立ならび商ひをするの様姿おもしろき事おほくは二三しよ遠地の田舎より城下へ市店見物にいろいろ入用の品を買戻り銭持は事をなしの種となりけり

米

元壹升代十弐文どりにて五合下なし但し元と云は伏見にて升なし五合斗入瀬戸茶ぐん文は祢まで二十文山盛よあし賣之六文拾匁は五合斗の入物よ一寸ぐ山盛之ゆみまらは反々まあり間と拌にて二三合んつきぬが白米なり年分に三度づゝ出来て少へ米もよおく味もよしまことに入べ大概の白米のごとし四へ帝して一切にまで刈入ば付よは打からはそて豆田ろてうけするあり法のように歩と一切なし米俵は五斗古斗ほど入るなり境縦表の世うなるござをあみあとうかその中へ入き結ひむなり一俵の米二人三人づゝにて

持あつかふまで力よわし阿媽港へ此国より綿布積出す
なり夏は冬にくらべ暑さ下直なり〇茶の銘わかし

薪（たきぎ）
すべて中華も平生つかふ薪木甚だ香ひ能木を用ゆるなり

塩（しほ）
沢山なりおしなべて近国より来るなり

油（あぶら）
菜の油椰子の油多し此国椰子の木沢山也
髪結につけるもやはりこの油なり

酒（さけ）
日本の焼酒のごとく強き酒なり
あまりよろしからず

肉（にく）
牛豕羊牝牛鶏鴨鵞
すべて細く切て煮るなり

魚（うを）
赤鱏沢山にあり川魚鯉鮒
うなぎいろくあり

青物（あをもの）
瓜茄子其外にんじん西瓜此外日本に同じ蜜柑
橙年中青物あり此国は寒さ和蘭の奥にあらず

豆腐（とうふ）
白くして日本にかはらず二寸四方ほどに
みせしものなり

昆布（こんぶ）
日本より渡るなり広東より来る
あまり積所へ専ら用ゆるなり

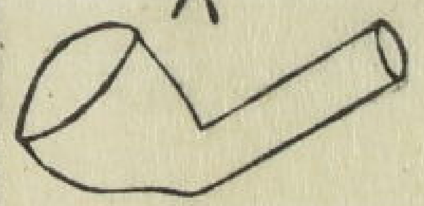
呉服（ごふく）
きぬもどんすさやちりめん其外いろいろ結構なる織物あり呉服店
別て作出すの木綿もあまたあまたござりましてかぎりなし

絵具（ゑのぐ）
何にてもいろいろ色まさりて一段別なり
気をつけ揃ひ格別よろし

多波粉（たばこ）
黄色萌黄色青色是ハきざみて
日本ニ味ハひとてもかはらず

茶（ちや）
同日本にかはりなし

煙管（きせる）
らうハ銀太ちうのかんくひハ
吸口ハ焼物多し象牙もあり



のこうし

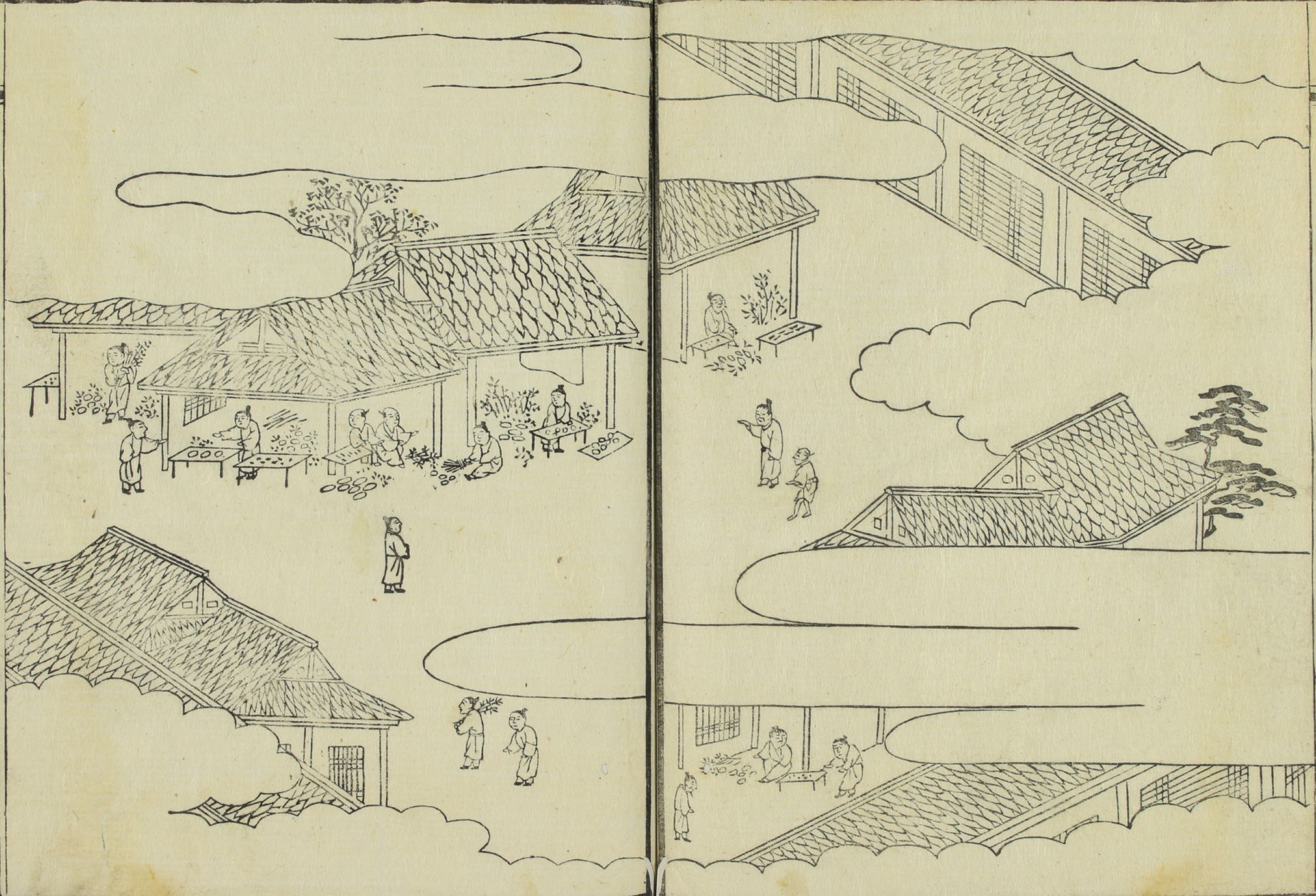
硯（すゞり）**十露盤**（そろばん）
大概日本ニ同じ

墨（すみ）
墨くあしくくさい墨のごとし至て上品瀬戸物のまるき如きと云是の
まご字まても持ち唐墨色よろし墨の性稀にて下品なり

筆（ふで）
日記筆ハ国にハ一本にて日本ニ異なる衰表中にも文珍先
ちんぷんかんのかう筆ハとかく上物あり

紙（かみ）
唐一本より多く集る年々唐紙を用ひらるなり
此国にてもいろいろ出来く唐紙の類多なり

書物（しよもつ）
此国にも制本あり多くハ唐土より渡るなり
又福州南京よりも来るなり



扇

鼈甲の親骨中の骨まで八方香木あり又一角まていろいろ親骨に細工せしものもあり代は十匁よりあり極上の品をかまへてあり

菓種

何によらず種の品太さざまなり 口によくすべし

花

十一月十二月頃に牡丹芍薬のるい咲きあり 月々季節の花など皆是非ふりにあり

皮

鮫 ならびに牛馬 鹿皮さまざまあり 三味線に用ゆ 蛇皮とふ

金道具

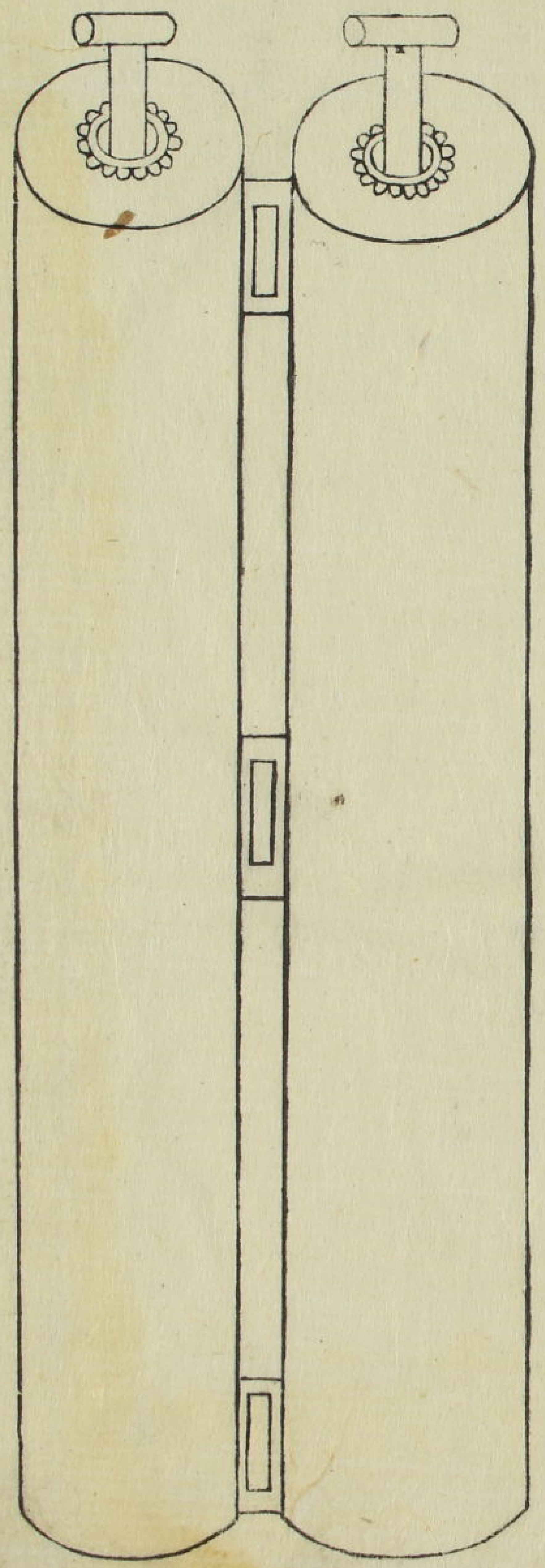
真鍮 唐金にて細工物あらし 錠は鉄にてかし打あれども 鉄は真鍮の打物と遠州打並へ角はなし

鍛冶

此職はむかし平生石火矢鉄砲数多こしらゆる 具足軍器にかかる職なり又在所の品に鉄を使ふ

鞴 何に用ゆるも金物の道具なり

二ツ鞴にて作るなり



安南の具ハ新地産にハ唐物よ不出る済どもつひぞ聞へす
實に出る氏女商人稀くの品を持出ることいへども何ほし
と書るしるあり

此國ふ出る物の大概

碁　碁盤　琴　升　桶　麹　塗物　硯石　烏賊　下駄

蘇木　麦　饂飩　味噌　碁盤　蒟蒻　牛蒡　豌豆

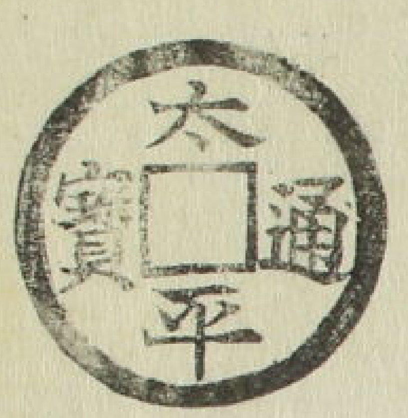
大根　桃　梅　栗　林檎

此ぶんなし道具るいふくてかふりぬ品ハ瀬戸物多く

しかふ自作よろしくく大用ふなり

貨物

安南國太祖順天元年鑄之
寛政九年迄三百六十九年也



銭の大きさかくのごとし穿格好よろしく大きし
此銭も至てよし銭ハ薄くまるくさきよふなる
三都ふおゐて同文字の銭済山よ見ん及ぶ
とふどもあ銭まくなし持渡る銭瀬ミ一文
見ても此大きに径わ違あり

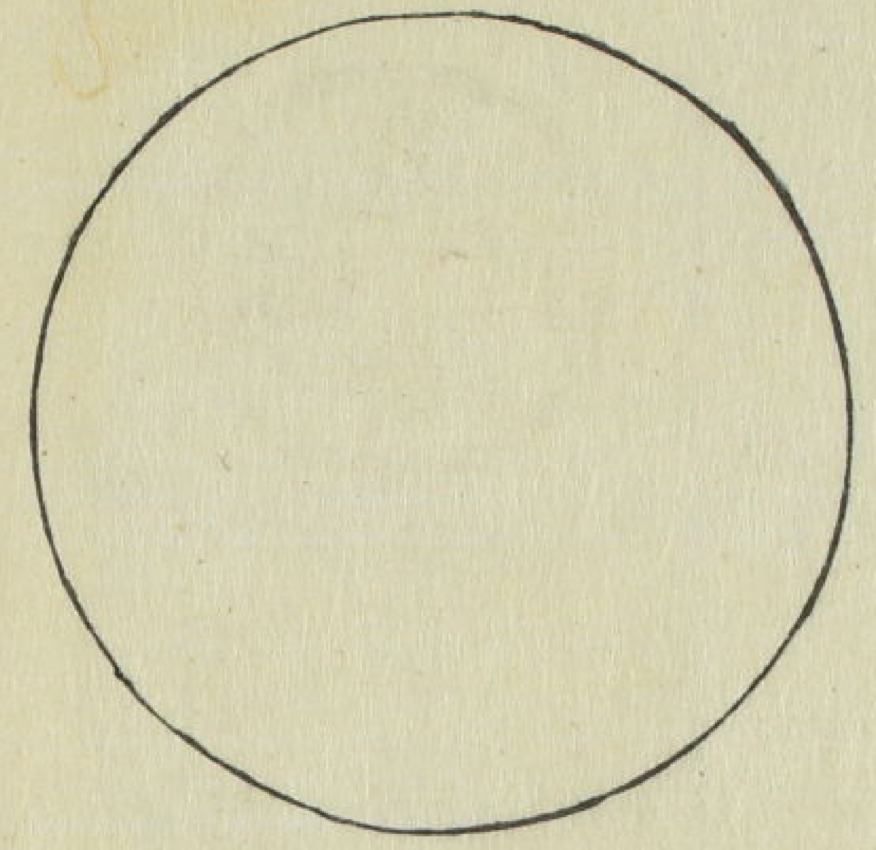
此銭安南國通用銭なり

壹貫に六拾文つゝひもにて一卜結なり[?]

三貫丁百八拾文を一本とす

十本 三拾貫之百文つゝなされ申し[?]

但し十六貫程の右場にて商ふ[?]



金銭の大さかくのごとし

但し表裏とも模様なし 地がね[?]

右の金銀を懐にして何方にても調へ[?]

つ[illegible]銀を出せバ此[?]切銭にてよき

らざんにて切銀[?]よりけ[?]の[illegible]

切ましり通用なすとなり

安南國の年号同文字故に字に記さる[?]

此銭我国の銭なく大平元豊等の[?]

此銭に似るを景興年と称するなり[?]

安南國の大祖頭天元寶の銭始て鋳しの事考へ[?]

これをバ此国に用けし事も　日本百二代花園永享年中[?]

の事と相見へたり[?]

南漂記巻之二終

南漂記巻之三

深節

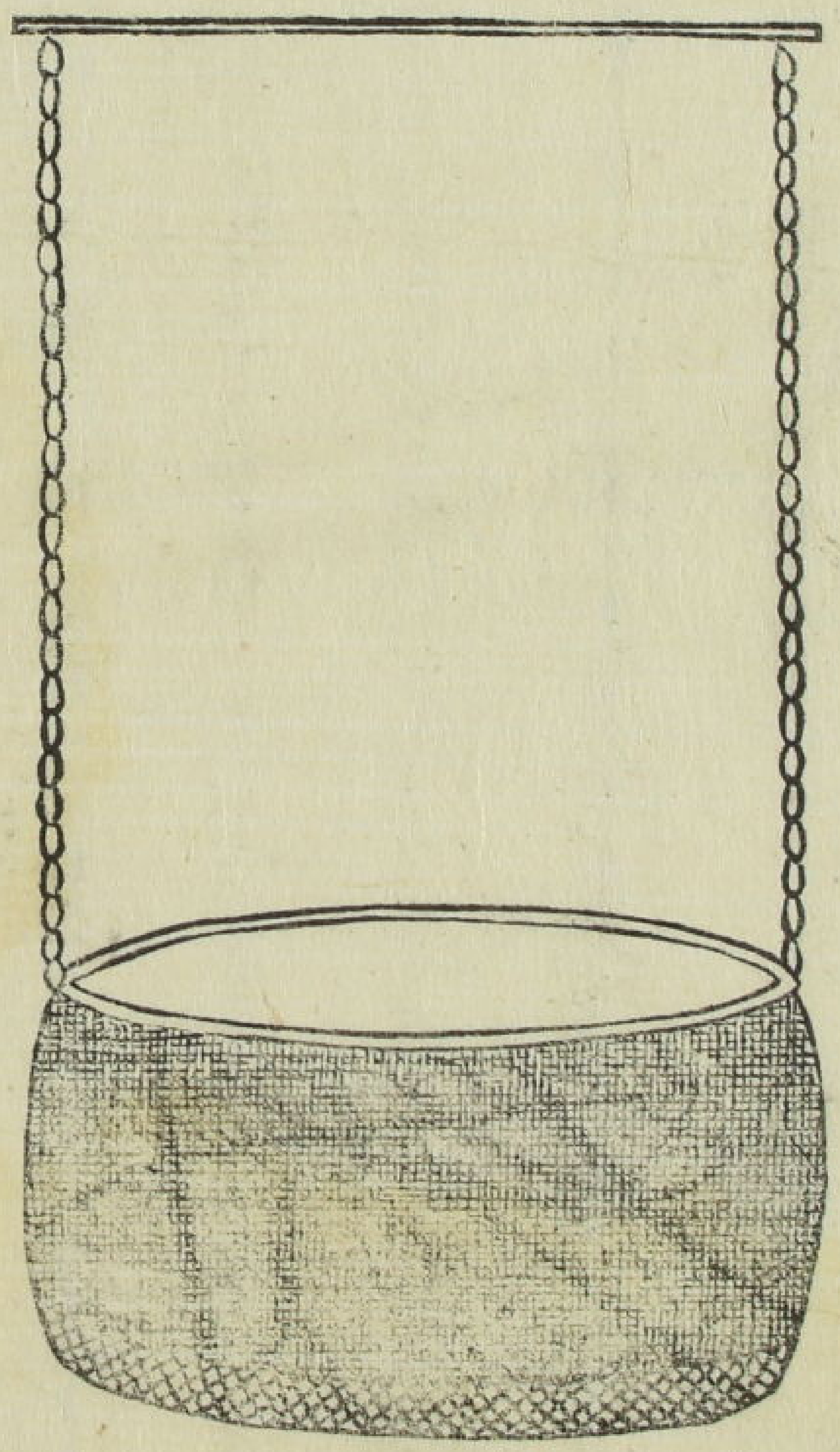
去る寅の年此国へきたりしより二て月をかさねて六人の者
ともそろふくなりしかば一しほの淋しさまさりてなみだながら
あるかしき時よりの思ひしのぎ身のうへこそ只明くれも我
国への便船のよしのおもひ十人のものども再びたゞ故郷へか
へらせ玉へと祈りしかひもなく国王よりの
のぞむ事あるを許しやと勝を折てしたりし
新此月の深楽舎まで此国まで寺家の人群集す

福田文庫

しりうが宮人庵よりさしつかあり程をたえざる逗留な
せばいづれも見物まざいるぐさゝ出ゆらしく
見しかたどものとも思ふまゝ心にまかせよめぐ〳〵城下
の両又吉町をづまをまでしもあるきく名所どもなふ〳〵まえ
なしよりよいつとなく馴染を出来てりまけ一二郎
とあるに六十斗の老婢男子三人ありそるあり
貴末子以家へ度々遊びよ行きしハ老婢ハいつも茶など
いれて出能了寧にとてなしけり折ふし老人留主
のせつ出稼ぎとどりしかバ老婢語りて見るハ宮人ハ見ん坊さま

やまと三人の子ども一家をむして其ぐ留守を頼ま
三人を共うる宰深切にいまく来もなしまこと且ハ新まて
酒屋にのと思ひ橋手能うりしとよ人家内も十人余人
あり風に一度三度しより其後ハ毎日彼方よりも呼びに
来りけり此家へ行ぬのせくとしなりとも身のよるふれバいつ
も朝より暮まで又ハ宵まで長話をなしくめぐ〳〵
かりうふ諸国ふる噺の物語をなし〳〵かう
さたもありける事を四十歳あまりの女房二十七八歳よ
て子ども二人あり惣領ハ男子なり次ハ二歳の小児まてせ

ぶらく庄を乳房を吸せ寝入ば二階の裏板より釣
さげありし細き網へ入
但し此網ハ糸にて目こまかくそこハ幅二尺よ横一尺まで又そあそく無之



網をゆりうごかせバ猶よく寝入るを其親ハ家業よ出精して

中よぶらつき放蕩魍魎の子乃世話をなく甚だ工夫乃
奇麗之極毎日町くを歩行ありさへ家くよりナイくと云
て手招をなさを少も是れ出来ならぬことなるべしと何
やもらぬ差別なく招きし家へもいりなれバ菓子やまそ
の種くのくすしまんぢう孫出来ると出し味よ風味ハ
よしと云ふ遠慮いくつも給へて遊バてものが悦びるもうそ
あし日本をなまんぢうぐらい或文づヽすらあんハ白砂糖よさ皮
格之形ぞさとう一寸四方づヽよ切しもの一文づヽなり
くの菓子をあたへまさ餘やまてハ身ちを好るまいとさせる
因如ハ紙るい墨筆いづれの家よてもナイくと呼ぶ方

一いまつり積くのものをとりしひ廿日斗まれ彼是と附をと
毒々く計の外ゝ安くなるゆゑ別く酒屋より芝居ゆ
誘りき八つ過より見物せしに何の藝中ゝ縁ゝ役人の
寝言のたとへまて一向りのとは只顔をつくりしもの舞
臺ゝは又人かどうづゝ出るてせりふしてあるとはいへどさして
面白さてしもなく見物ハ大勢込合ゆゑやくと只代銭を
とを我一様めたる代目ほとく腹立つよく中まれ頭ゝ痛ゝ
挽かくそものもあり芝居のたてるを待宿所へ帰りたるも
有し御帆の役者と云て芝居
見物ゝ行ゝ箱別之中毛の表ゝあり
新て日本人の笑るゝなし

気分のとして積くの麺を振舞し内ゝも素麺ゆゑとて振りし
たるうどんのごとき太さのめんを塩茹にかしかけ汁は
好くの池をとりけしりの出汁あしく出ひゐれども日本人は
山よ箱を取男気とらぐし三日経ても喰ふ事稀く是よふ
らぬとのあるき後も毎日く飯ぐくに取併ふ安ゆ行く
松茸てとどもにあつり後の老はかしく記を

翁戯臣

代地町くふ勘弁し従来とけくりの切あるでしくなり

家々に豕羊羝羊犬何れにても二三疋ハ是非とも飼おくべし
不時の食用に当る事多し 此ハ家毎に格別便有なり
是斗ハ食をあてゝあるべし

豕 ぶた

年生の食物ハ米を以て与るなり
糸魚ても悪しきハ一統かくのごとし

羊 ひつじ

日本にても米と塩とくハするに利あり
一年に三度も毛をとり[illegible]なり

羝羊 やぎう

毛色すべて黒し 甚だむさき
けものなり 嗜物同しなり

猿 さる

至極の[illegible]の衆にて尾の長さ二尺余三尺もあるものを畜く
こしらえ面ハ[illegible]ておくべし ふざるハ日本の[illegible]の
あり尾長き猿[illegible]なり

馬 むま

大きなるものハ耳壹尺余寸[illegible]ものあり 背ハ一通りなり
上馬ハ耳長きを用る 耳小さきハ[illegible]なり

牛 うし

角壹尺壹尺余寸余もあり背ハ小さし
日本のうしよりハ少し かたちちがいあり

猫 ねこ

日本にかはることなし

鼠 ねずみ

日本にかはりなし

鷄（にはとり）
かの国ハあかし時をうたへども定りなし 時刻いつも合しなし 瞬（?）出へくなく

鶩（あひる）
家々に沢山に飼置川々又ハ世ハいどし置 鶩時ハ肉一入多り

蚊蠅（かはへ）
多く大きし何れも年中たくさんなり

蚤虱（のみしらみ）
年中おじし此人肉食なき故かくぐくさし表と湯をあぐ（?）
てうすかなき虫此ハかし虫のかりかりなし

虵（くちなは）
大きなるのハ大人家の中沢山に有り人ハ有なくにし（?）
あらめし皮をうりし三味せんに張りたのり

象（ざう）
國王の飼置たりしを官人の案内にて見たり 高
白毛なるサ七丈五尺　足丸サ四丈四寸
鼻長サ三尺　牙　三尺
尾長サ四尺七寸　目丸サ壹尺あまり

此外様々の鳥獣虫魚もあれどもいちいち記しがたし
其外ほかられども甚外の国なれ其の国中の事

強勢
人気実情ありて又強勢の事のミ多し異国人ハ誇り（?）と
止じ一国づつの諸侯有て清朝一統へとあり外国まで

も南国の諸国にハ安南国へ立より参て諸国よりも
日本と違ひ肉食多くしてこれ唐土のならハし之和国
種ありかくてこれハ此安南国にてそれ家々に畜獣数
多く飼ひ日用のかてに調ふしてあげてうま〳〵とめしめく
も日々に賞翫して心中よくなりしよりあつかひせつる日
本人への馳走とて我方に飼置く豕なとの総大道り
なびたるむきらるを呼延我人の目のまへにて口ゟ足を細
引まてくゝり湯二寸斗もある大なみの鍋といふに下に置
体をうけ其咽の下の毛にいさゝかもむしりとり其庖

右の次第をしこめれハ獣ハせつなさに涙をうかめて見向もせず
ゝかりして流るゝ血を桶につけ入酒の香にまじへ吸つくし
温き飯よりけ賞翫なし其あとの血を瀬戸物の鍋へ入煮
詰るべかりまゐらせ酒のさかなとし獣の口ゟ足ハ切捨
大釜に湯をたぎらし其未死切もせざるを其の侭其
鍋にあつて引上毛を抜ハ一筋も不残さるもの不抜
をあとのけなし咽の下より裾へうけ四足にたちまち小
口よりづかくと細くきり別に瀬戸なべに牛豕のあぶら
をたぎらし其塩加減をなし汁中にて煮詰め能

じねんに鍋をのけさまし玉酒の肴又は飯のさいに宜
ふた目も当られぬてしどもなりぬさきしてふれは生よろしく
きつて始てみし時は一口も喰づくりのそれはむかし鼈野牛
されども大和八郎のでし鶩鶏も生なく血をあがり
又は猫ぶりいふもくろきて煮湯へ打込引上ては毛をとり
種々の料理方家々にてこしらへ内より給物になし女
子共も食させてしけしうしぬてくれ思ひろしけるが
近く代々もなるを喰なれ二ばさしてふしぎなるもなく
只旅客などへは如なとは野牛の首を打落しそのまゝ

首ばかりを卓机の上に出し其外の魚肉なる諸物など並
揚などしてならべて振舞して客を招く料理にてあり
ふしは代々ふを付合りまさ或時は江戸人連にて城下
の町をたゞ何となくさまよひ出しに若き男の若も組してを
ぶつきに若衆云合ふくとせんとするよりも代方どもの前をまく
王冠をまくりて出るに小吉郎は使者なるまでは役をとりて
一人の男の片手を握り引つけさしよりて大道へ投付れば
のこりは又人一度にかゝるとてともせず仙臺生れの我方
まで腕まへは遠者なり彼等か面でも日本の私ありとて

連のものハ主を指せ日本人の出人をさんぐよゑやうしけ
是が分限の出人まであきれ今もし部分ハ仏よきさて
くたべうとし手段を何事一つとても捺さしきるものを
ふく日南くとおぢ恐是ハ頭方より仕出法官人六つも皆へ
しふや上より城下のものぐまでも觸までもまうりしろ
少しも出人構ひなく是周より肴魚てなんど
面白さてしをふく一息までありけてまる武財とおりろ
酒屋までたまむきでるれ株をしをなしけるが仕事ゑ甚
上ノよりて連のものハ一人も揃ずでされ山吉良からく立文段

ゑし始をる夜よりのく是を小勝りをれ太きよく我わしえ
主様として机の上中くよるてゐるゐり又仕家酒肴費多
是ハ金上ハ俵物多く三つ出ゐ裏へ出ゐく二三俵立いびし
米弐俵を丁寧しまとしあげ又たかくよ弐俵をのせ
仏よく歩行ひろくと曲持なしけるほど家内を許の
ものまでもみん感まきりいゐるて大力の角力よろ乃
ごろく評判なしけり　仕出角力といふてふく又肉食たせども
てありり又道留中よ河娘浸和の名なくとも日で仕出ハ
鑄錢のごくをうるる錢を持歩行出人と何角なるし

合ハこゝよりも鶏を拵出す方にも毛爪の取付ハ
どうしてもある支那釘の先をかうしくとを寄合せ
それより償く方へ置しるゝと五爪に巻させ絵かくと
なしれハさして珍敷くも無れど足にまるし釘ハさらに
それより西方にも血をしぼりよるりの出人肉食日
ひに多く獣料理などハ喫ず手強く食事とも五方
ども逗留中療治殺し六ハ殊に出生まする側あく
アるハ去人も皆死まうりさぼ三日間を向ふより鼓を主う
あ溺しハ実よおうしく四ひりの宏安之廣東より渡

是ども菜種に用るのこなく療治にふつてもあるじハ習中
足やいともち六人間の中もほ出人足がハあゆくもせず
みん仕かまて豕羊の料理とえし時ハ恐ろしく存せ
が療治と料理の威にも気ひの種と致しまと

時斂飼

王城又ハ城下町く幸てまても二六時中千府くよ打木
とおあるさ大家小家とてもこそ悉くに時斗の番人ハ
その町限りに壹数附を出一町ごとに門くあれど数く所

まふしたる又家毎に門のしまりもよく扨て大戸ハ皆
く二階のまどもしとけせんなく宵に暮時より上よりお
ろし寝張も戸も貫抜かけて手燈などハ一切なしあ
不用心なるゆへ夜まハりなど番所より盗賊あまたも
いでてハ殺しかつ火つけいたし数々ぬすみなし狼
宿へもう三度まで盗賊来りて家内の者共を
割木の如く手ごろのものと持追かけ切りしにふ
まだ出しや見合もせずとみけるを一人まで立たき
外せうしさんと三尺町も浜まで嘆きて追切しふ

職ぎまに驟集ありし夜ハ飛来るく手早に梯さし逃げ
ゆかしれ其跡より皆く手ど打撃ひ宿所へ立ち入る板
都合三度までも及びしが其後また来りしも首尾よく
幸き仲太といふ者まで用心棒をもちて追ひとめ今
一度来りなバ手並の程をとらさんと毎夜待ち居るも
ど体されども同じ盗人にてありしや又ハ外方の
ものともおもはしれ再び来らざりしハよくもおもひ
ひ知る又城下ど毎日く歩行くせる異形の人とてんしに
到る日方又ハ三尺日方なく寒さも寺斗もある板と首

つなあらしろにて銅をおろしまたハ背中にも人のたけほどもある太き柱を負せまはりうしろへ頸を付銅をおろし或ハ両足より長き棒をつけ引ずらし或ハしめ所々く銅をおろせしりの所々をつきさす人もなく兵気僅よぶらくて出羽棒を引づりくるのみどころ日本のかざ穴のごとく極く珍敷ものにて出入も鉄乃れバ其罪を犯せる人のよし城下にてハ見番れ殺し細の身の身みうけるにて流山なる皆日限の延迷あるよし始女方どもと見物よ来りし内にも右のものども幾人とのふりし財ハ

珍敷おもひしなり揚く本ハ牢屋敷へも高い和より覗きたる世バ内よりも首さし出し見るなり元牢屋敷も三之丁前も有り又逗留中に乞食二人見張て門ゝへ立ちと出し食を乞事なく然しぬるとなりしと人く是のなり

服

衣食の二ツハ人間第一の事なく高位高官武士百姓に至るまで服を以て位を定め其分限の格式あること異国本朝其例有織古実の書にくはしく

安南國服

明朝の通にて袖ハ細く手先にて壹尺斗長し 後引ゴシト云也 褄のごとし

笠にエロンとよめる

國王

黒紗綾 黒縮緬 黒繻子 一重帯白也

黒鉢巻カンと云 金の櫛 履白なり

黒塗冠 玉王 王子方斗なり

陣中城下渡御の節ハ歩行にて糸の長柄傘をさし

うけ先供皆々頭に紗冠をかふし 青黄赤白の絹なり

櫛ハ亀甲水牛一角あり九二十人斗両側なり

従徒 二千人斗同し装束なり

手廻り 銀の田楽彩盆 さゝせる

劔 柄ハ金銀の細工也

多々鼓彩入 毛氈手巾皮にてつゝく 一人ニ壹本づゝ持なり

衣物 衣ハ紐くゝりのまて白ろの方一段宮し 模うけあり 袖方にむすびあり 表裏の織物にて結構なり 上に金のさやかたあり

稀 絣の如き縫物あり 色さまざま種々織物の 一袋ひあり 又六寸本も二行にあらび行なり

諸侯　装束青黄赤白の綾織物いろ／＼あり
冠巻ゴン国色　エロン白色はなし
是牙国王白なり
大将騎馬にて営城総門まで至る

諸官　装束同断
儀式には三人供又人供道具持せ行
何れも騎なるは家物城下のるは無し

町人　木綿絹類色はよろし
白木綿を丈斗も首を頭に巻たり又げは木綿
ざうげいろ／＼のきぬをさし又かしらに巻し

百姓　木綿に麻を付る多組に入たるもあり町人百姓皆
段門ともく男女ともに下帯也またさらしま旅ゴンと
さくなり

腰物　地は降く細て手ぶしいろ／＼に曲りて又のだし有
て自然よき物を切て只家事を只家だろうなり

僧　禅宗多く天台宗もあり出家の
服はみな綴衣なり

男女庭

禮は百行の基にして正しきを以て徳とし義とし
礼よある孝とし事を礼よ修する国は日本もおしやむて男
女七八才の比よりは手習学問算勘継等をつとむるを総

心の内にも礼ありてこその師たる人の能教へさとしてこそなり
総じて日本は神国にて皇の古教へ正しく異国よりも
君子国と称せしことや抑まさ安南国までも政事
たゞしき故に民百姓よろこびまで徳を正し敬ふべし
孝を尽して日本はかゝりし事ふしてなど云
土の本をまもりや男女庶をあつしてかゝるを本ありその教
の一二と云ば家にも二階も下までも梅うけるゝ平生と
是よりうまう人まさへ高官の人の来りても只
その侭まく挨拶なせば来ることへもしうけへうりし侍り

無益なることなり何と申自他家にいふても肝れの膝にみ申せ
と国風の一つみて官人なべ伏方ども出合くせる者を下げ辞
義をなせば都てふしんの作をあまさしてなかく世人は行儀す
座をなすことも何ぞ手をとりさけるまでもなく適すかりし
人をうれば膝を折両足を揃へ出し和国のたゞ云への
家するもするまでかり是を皆あるべば両足を揃のじ
又てこしかけつるゝは椅も皆おりしものよくされば
外国の人膝ふしの骨うてまつてず自由ならず女と同じ
く目て縫升つむぎのせつは只両足を投出し目上の

人の喪あるとき公ごとに停止ありとて楽不礼よきゆる
ものなり只武目なとハ弱く衣服とあらそふ一生にものを
もいふ次に立ふくろあるを其内まで縫合し三度洗ひを
まるり見るハ襦袢正しく見ゆるものなり平生ハかようふ
のゆゑなく男ハこしうけよよるもうの女ハ足を延し まるハ
居所を下に並孫を立てつまさきをまへよ寄せるゝこと
我国の人なるハあるを足うけくぐらしく縫ふゆう
ふとおもわれるはどの此地にてハ武家丈夫にて針のめく
あし針仕事なるともて始て宿りまで孫をかくらん

双六を組食するせしとふ人見物せしハ此私よりて愛して援て
ハ一日よりの文年の暮大晦の夜ハ家にに竹を立て門
まれ灯燈を掲げなどゆうなりゆるし大晦の鶏は王よりの男を
給りうしを出風四と感じさりとえ目ハ先餘ぶみんとなと
を地黄よふかしこれをも祝ひまよりの男女衣服をあらため
それよりづるとさしてかゝりしるものもなし何ほとりても年
の始ハいとひ寿いふとも此ほどてハ大晦の歳別て酒
と書詩をとうひ役をよろの教人く目しろくてかゝり
ハ食用みて尚あるまの有此家にて又を旅宿などの

雪隠と云ものハ大表に地を深く掘て下に壺桶をふ
くし上にハ床をならべ小屋を建其中に又櫓のごとく組
ミの座を両方に板を持せあり其所より便を通ふなり大
概は埋たるはとらぬ又別に小屋を置かゆつたなる下略の
者ハ辻に此家の門々にありて便をさせて甚だ不礼を
し小便所もたて桶をならべ未だ焼の壺なり滴りたるハ
貴物のこやしに和らげ五穀に肥てよしとしたれば
年に三度も熟させる也同じせうへの内あれど三子里
を盈ずて為さぬ是等の遠も有つしと日をかぞへてぞく

らしりぞ

関帝

天照太神宮ハ日本の惣廟にして西ハ筑紫の果のはてく
東ハ奥のはてまで老若男女あゆみをはこび敬ひ奉る
人間ハ勿論禽獣までも神徳の余蔭を称へよく
あることなるの果なりそれハ大神宮の末社も多く有るより
今もまるまで関帝を祭るところハ日本にてそ伊勢大神
宮を敬拝なしとそくなる清朝にハ関帝の廟所ありふ

あり安南国にも廟迎ハなけれども亦に神と祝ふ社も
多く家々に関帝の像をかけ掛物にし神の棚
にまつり前にまいりてすゝめけ日々傅りのそなけ是を拜
し富貴延命子孫長久を祈る事又小児に小守
となし首にかけさせ悪鬼のまぬかれんとてつて是
を信仰せり又日本の山伏のやうなるもの有是ハ祈祷若
しは是ならで来る人あり是ハ鉛より種々の傅へものとし
ら清き卓机の上にかざりて五色の円き経を唱へ
神の棚をかざり文ハより口にて呪文を唱へ行法
に時とうり唱へるも沸いその後酒飯を出し饗応して
我国の荒神祓に似たるもの也又悪魔降伏を祓ふ
ことさしてかもうしてことなし

関帝之小像之寫

小児の守につかふ

諸書に出る関帝廟之記

安南琉球安直朝鮮呂宋暹羅 甚だ惣而廟宇を建築すべし 諸夷不祈ということなし

今代年燕都にもむく遼東より帝京に至るまで数千里の名城大邑閭閻衆盛処にをよび廟宇を建て漢将寿亭侯関公を祭りまつらざるといふ事なし人家に於ても亦私に畫像を設け壁にかけて香火を置其家に於て飲食必ず祭れ年あきべからず祈禱を官負外に任に赴くもの於宿して廟に謁し甚粛敬なり余是を怪んで人にとへば獨かれば北方のみ然こしとなきにかくのごとし天下に

遍しと云萬暦壬辰のとし我國倭軍のみだりに侵犯の国奢かくさしんぶ天朝兵を発してこれを救ふ六七載を連ねて丁酉のとし又天將諸営の兵を合して進て蔚山の塁を攻むるに利あらず戊戌正月初四日師を退く遊撃將軍陳寅くるの有て力戦して賊の丸に中り載て漢都に還る病と調しむ廼ち寓せし南郊崇禮門外の山麓に於て廟宇一座を創起なし神像を設て以て国王をなし諸將揚經理以下各銀両を出して其費をたすく我国をもまつことを助く音於て上もまた從ておそを礼る余遼司に備り諸僚と共に往ふて廟庭に詣る其像を再謁をも去を礼して之をみる而て

而して童蒙のごとし鳳目鬚垂て腹を過ぎ左右二人甕ごく
太剣を持侍立これを周平周倉といふ儼然として生るが如
く是より諸将出入ごとに参拝して更に国の為に神助を祈る
といふ賊却て五月十二日大に廟中に聚て云く是関王の生
日なりし雷風の異ことあり是れ則神なりとし是日天気清
明午後黒雲四方より起て大風西北より来り雷雨並び作り須
くありて止む人皆喜て曰王神おりて臨りて既にして文煥
南に安東星州二邑に於て廟を建つ安東は則石を鑿て
像をなす星州土塑而星州甚だ霊異の跡を著すといふ
未だ幾ばくならずして倭酋関白平秀吉死す倭諸屯悉く皆

撤去此まで猩々猶かくのごとき者なり豈偶然ならんや昔苻堅
入て寇す晋の謝安旌節旗鼓を以て蒋子文廟を祷らば謝
玄八万の偏師を以て強秦六十万を睦に八公山の草木風声鶴
唳説の如き者必く神助ならず況や関王英雄剛大の気を以
て甚正しきを挟け賊を討つの志萬古を貫て一日の如し死して
滅せず安んぞ神應なきことを知んや嗚呼烈武京師廟前二
の表を竪て両旛を掛けつるに協天大帝と書し一つには
威震華夏と書し字大椽の如く風に因て半空に飄揚を遠
近皆仰で而之を見る甚帝号も亦皇朝の追崇する所と甚尊
崇の至るを見るべきなり

廟之記全文は加ふる所にして諸書によつて所をまつて和解して爰に記す

夫婦別

天地開け始しより人倫有銘州本まて陰陽雌雄
のわかちあり人よ夫婦の道定り千万の下つの婚礼
濁てまで神の加護をしれやまとくりかへし契りあへし
されども命数の定りなく何是一度ハ死先に此世をさる
と會者定離と説玉ひし佛の教へ金言なり要ぬ
生よ遺留の肉男は死して女房となりても若き女の
をさりて玉の姿よ残るあり偕老同穴と契りしも
冥土黄泉の旅よおもむくは誠にあはれのならひなり

貴人よく知つてしるごとくかつらしたれば公家の風儀ふるく
昔より若年にて夫に離れ寡婦となりても一度ハ再
縁する事を深耻とし生涯の道を守りて貞節をとほ
したる人何かしの悪を除きて死せし人々やぞ此世の名跡
として操を守りて閉じたちし人は稀も思ひ定りて文借士
方の町人百姓にても連添し夫の亡きあとまでも見なし
まくらの傍の少しの間より頭の髪を解きおろし
中を白き紙にてくりさげ髪して寄し中陰その
し彼の家よあり間よこかしこまでも見せしめす

ときこえけり

南漂記巻之三終

南漂記巻之四

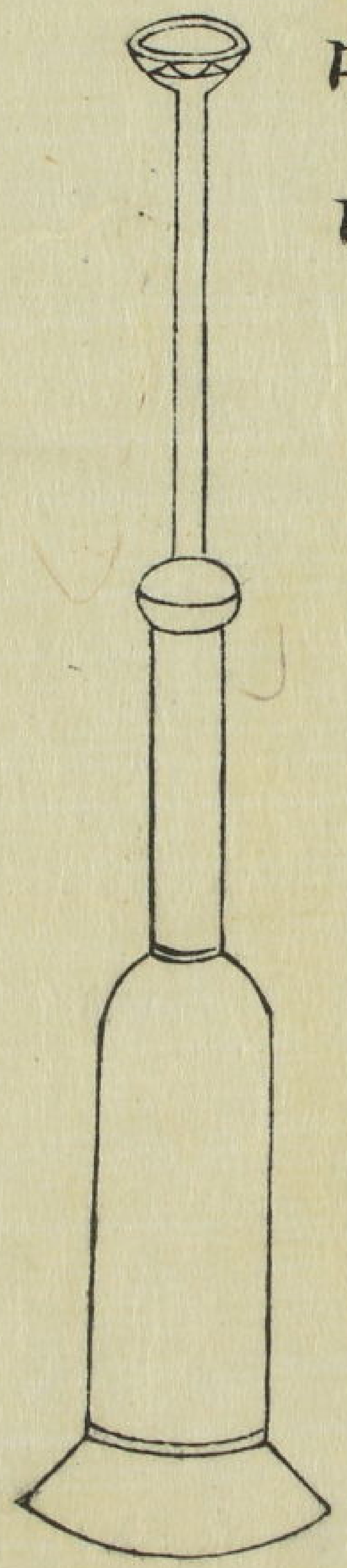
花街

異國にてハ揺女町と章臺青樓花街といて日本にてハ郭町中また所〻の地名ありて此國にても傾城娼妓立君有めくハ漂流人の見しはかようの場所一ハ立よりしとてじ娼妓とふへ川口より城下へ續し場〻へ每夜されしが屋形船に硝子の障子玉の銅戸網工ものの風鈴ものの旗標をつけ紙子の幕をうち中にハ胡姫三味線鼓弓とり客を待旅ふ毫の人〻溜合彼是もすの酒を吞手拍子をうち

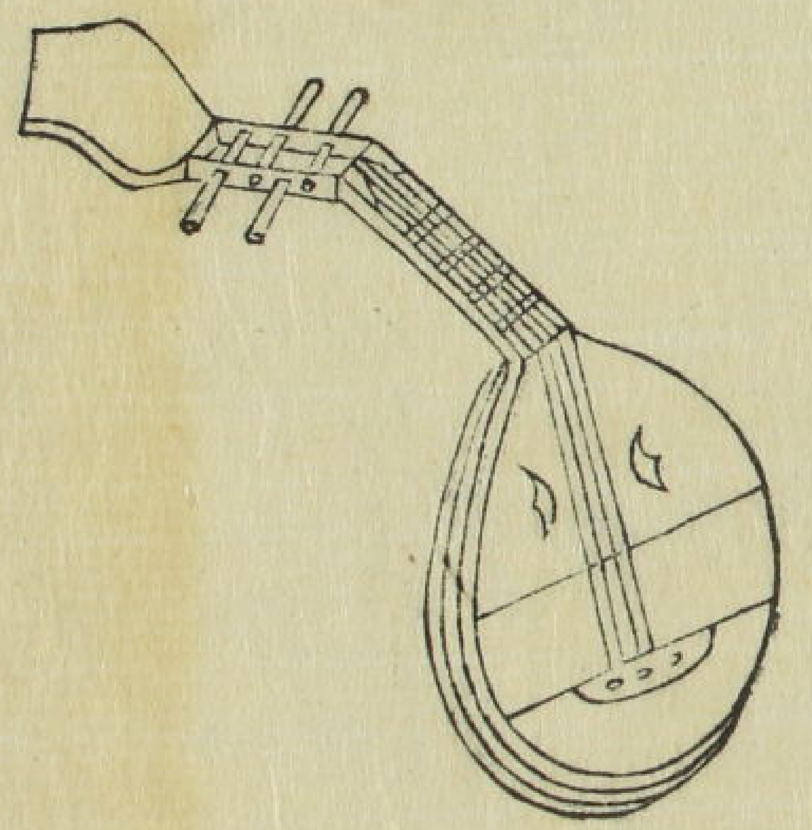
福田文庫

舞臣ともいふ遊山する者ハ其も結構なるもの也よろしく
目を驚せり又王様の馬場先迄にも立君あり是等も
皆縮ちりめんなどの衣を着し暮過より紅粉を粧ふて
立居ありては玄蕃袖しても繁昌の地まで餅に流れ乃船
着なる者は浮来群集なるにし通りの筋ハ大道せましとて
いふなる所に遊藝なる喇叭舞楽太鼓三味琵琶鼓弓
ありまく演多とよろしく見て楽しむものあり其あり秦箏
かつてふかし其図の大概を左にしるし次

喇叭

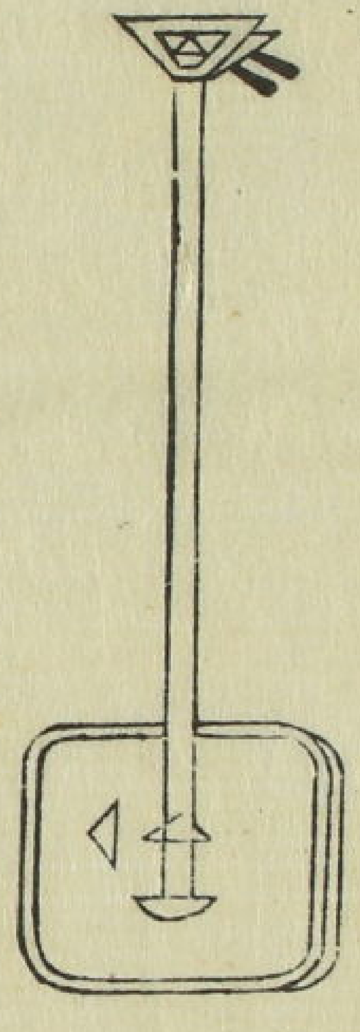


四絃琵琶

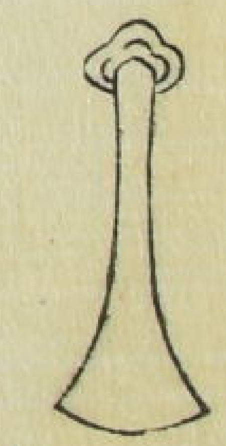


蛇皮線（じやびせん）

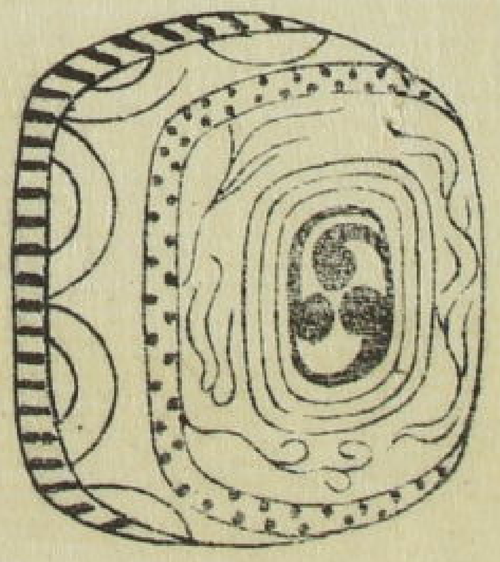
鼓弓（こきう） 糸二すじ



撥（ばち）

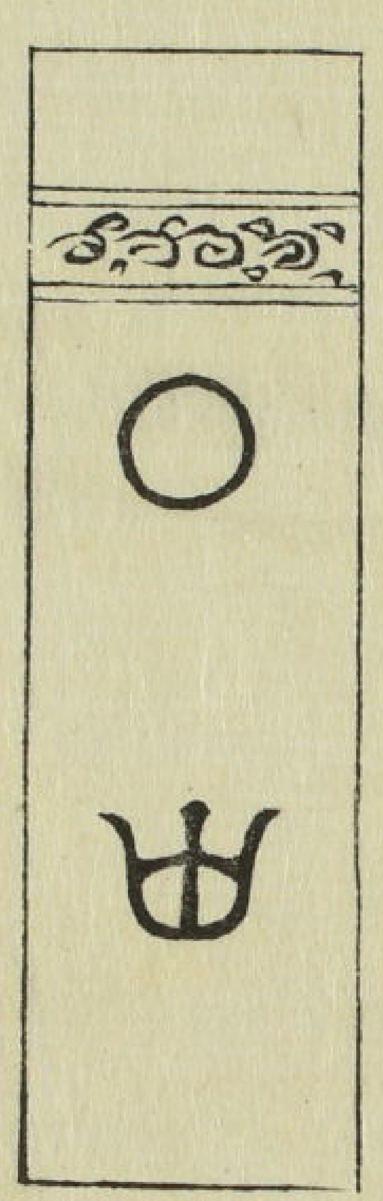


太鼓（たいこ）



三味線（さみせん） 鼓弓（こきう） 撥（ばち）そへし
爪引（つめびき）も多し

カルタ数六十枚



モヨウイロミアリ

詩（し）をうたひ舞（まひ）をなし遊山（ゆさん）まてハ内々にて楽（たの）しむ
せつ見え公家（こうけ）の雑具（ざふぐ）なるハあるまじ見え家（こ）にあるなり

欅（けやき）

本竹

緞子（たうぎ）をもつくる此ハ皮もさす木なり

楠（くすのき）

右ニ同じ大木おほし

樟（くす）

古木ニ至りてハ切くり日用ニ世ニ材木しなる
何れの家のつくり木と香ひおほし

杉（すぎ）

大松の帆柱ニきやうの玉芳有の京添山ニあり

松（まつ）

日本ニかわりなし

盤（ぢんかうじ）

大木ニて実ハ出人蒸食ニ日々食ふ事之男女とも遠の
くろき八此実を食する也葉ハ山中の屋根又ハ
かべのかこりにも用ふあり此木ニの外おほし

槐（ゑんじゅ）檜木（ひのき）此外大木ハけてかぞへがたし

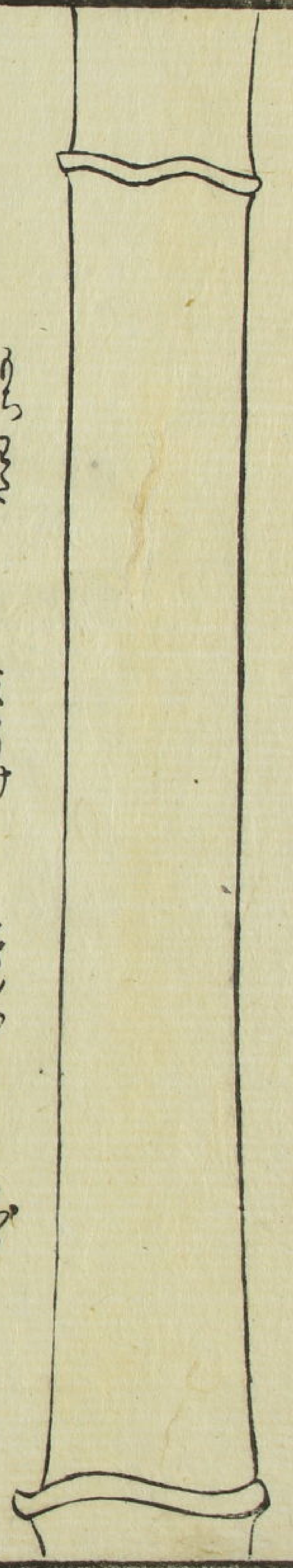
椰子油（やしのき）

此樹甚だ大ニして百年ニも朽ることなし葉ハ
カチヤンとくふて山中の屋根かべのかこりにも用る之
路葉と同じくつり実ハ食用とする也皮ハ紅の
網によりをひ実の穀ハ釘のかはりになりて強く
ぎのごし木ハ切くりて油をせんじだしとりしあ
ぶら髪の油にもちふ国第一の樹なり

右の外諸木数多出候しさ不斗を記しぬ

竹

寸法 一 ふしよりふしまで
一 一本 弐尺八寸弐分
一 一本 弐尺九寸
一本 三尺四寸七分

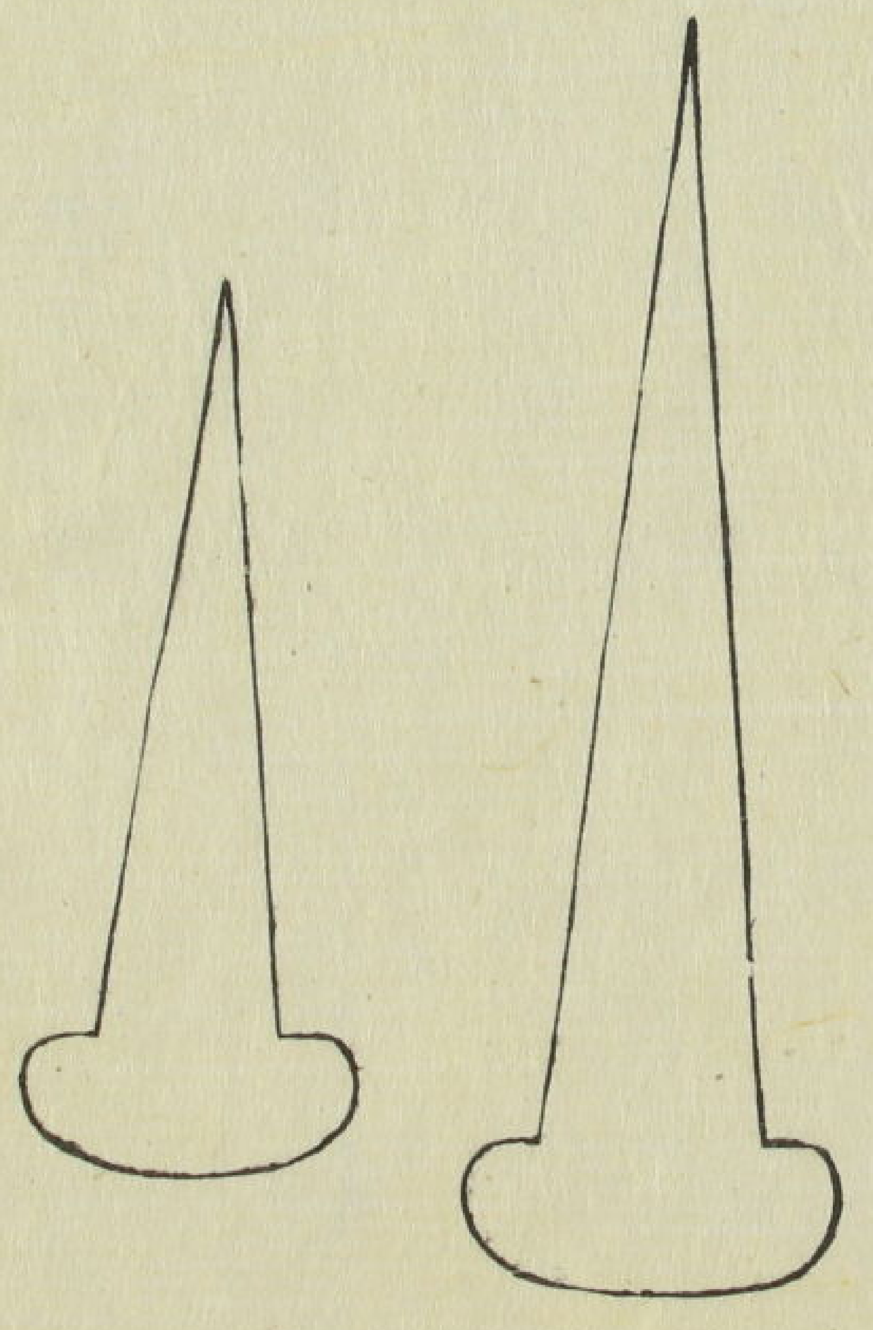


右三本の竹持添りくと思請し而寸法右に記をあり
大竹ハ壱尺五寸まハり或ハ五寸まハりも上下とも同じ寸法
ぐらいよりせまきハあし

椰子油實の殻すてらしるへし

釘之事　丸くぎなり

松の釘よろしく
用ゆるなり



和漢節用

弄頭清麗氏出ハ来り書の始よ管絃にしあり其後和泉
しまんの老のこしまで面白きよつけ淋しきよつけ用ゆる

おもひ出し驚しかるに吉清翁去年爰に有し時我
式節用二冊　一冊ハ和漢節用無双嚢　一冊ハ大々節用万字海　買求めたるも廻船に入
置我詠ありしが此度も石の巻出船のとき右弐冊の本
を持来りしにはからずも難風に漂ひ此国にて官家
なりしとハいへど弐冊の本ハのこりて後のかたみとし詠めりける
此本の有し故に始西山小村ハ漂ひ着せし時も真字と云
事をしらざる時ハかしこ字のいろはにて引出し此字を扱
て真字を書せし故に弐冊の本よくてことを便じ此を證
大の一助となり書の離有てしとやあらん王様の旅宿にても

国詞をしらざる内ハいろはを学んでかの二冊の本にて文字を
見出し通じせしなどハ官人通辞までも珍敷事じ本と
かしられしが後ハ毎々しく縁ぬ延びゆる内にも和漢
節用の奥にある男女相性の図にて日本の女の風俗とみ
てまど笑ひと催せり又其口にある不の武者の百ね倡なり
どなくハ大きに戯れ式ハ文字一つを二様に用ひ音訓の差
ある事を驚感なせり此出のよし官人が元より王城へ申上しまゝ
海帆まで何年に玉へ献上致し其後持来たる
後世殿中へ蔵の書持来せしが永く安南国の秘蔵

となりしも持主清盛此地よく我果して正月じに
納まりしやとふしぎのうにおもひうる新書冊太節
用の方ハ清朝の古銭まで持来りし是も此所にて宮
人の宝らくさきかの国の宝となりしなり猶よ文字の
徳四海を照し外国までも通用なすこと疑有ことども

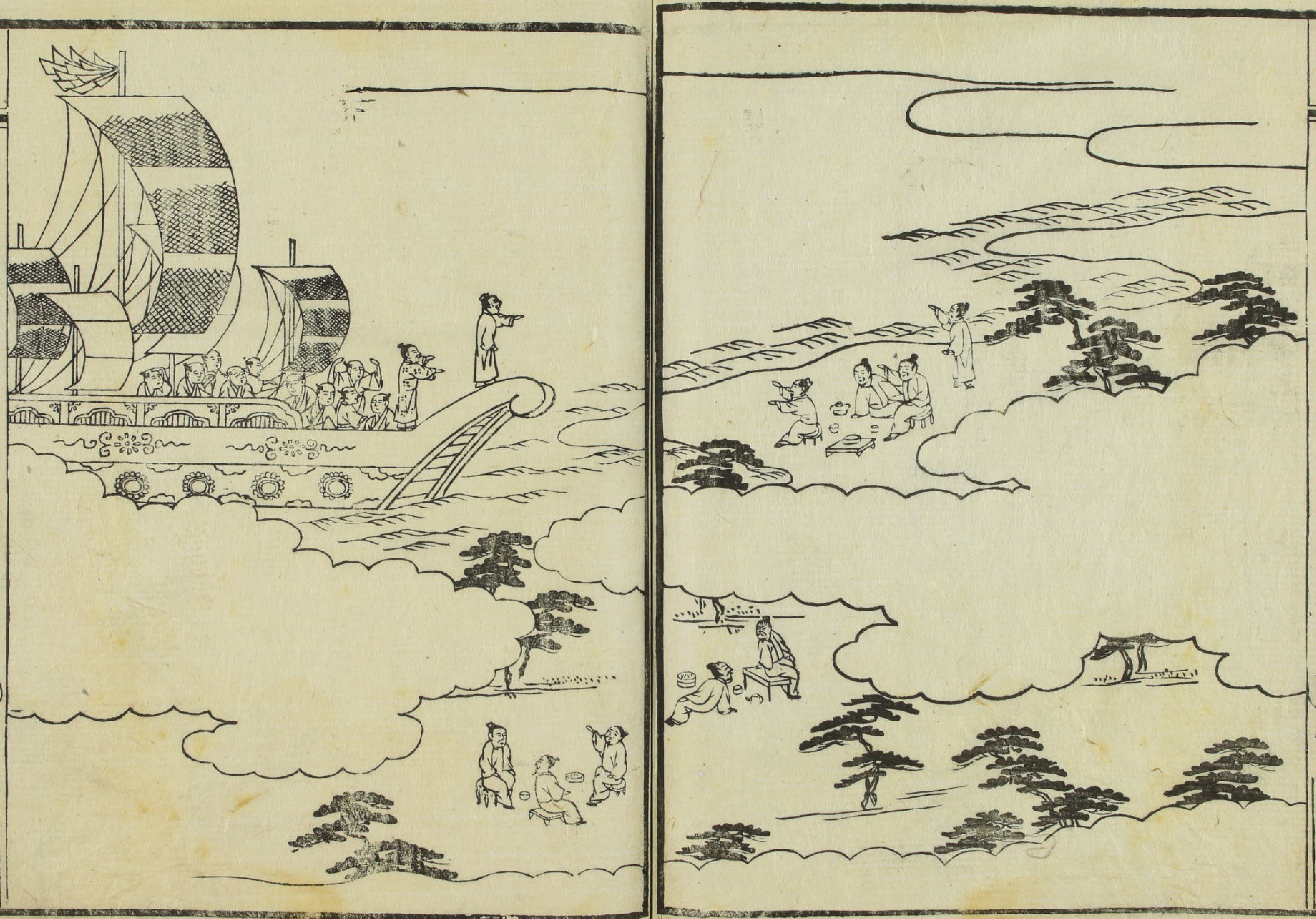
晦日

星うつり月かはり光陰石火のたとへのごとく此国へ来りし
こも早やまとしの月日を四月八日ハ佛生日とて国中の寺

くして卯の年の金氏あり四月下旬よりなりしことろ
国王より旅宿に去る所の十人の者ふ珠数をとさ
との事ゆへよろこびくよ支度なし廿九日未明より殿中へ
出し南将にいたり流國王出御ありて通辞をもって仰
渡されハ漂着以来和風つよく帰帆の時節去る所此程よ
て追て南風まかり船の通路も自由なるべし日本へ通
船の用意をなし送り届け度おもへども去四月より西
山国城に東盤く国人を果彼地にわたり此節とも
ど日々軍船出帆なせば国中の人不足にてさき日本

一ハまたかくし来舶阿媽港の商舶ハ四月中に出帆の
よし唐王より渡海し唐人ハ在留多く此所に来
天竺の出績より預く日本へ帰帆なさしむの名跡も
今まさし何角と調度を揃へ相待しもの何かと
用意あらハ宿人とりつくりて心とめ頃日多く上意のおも
むき通辞より申渡しと出王へ伝聞なさしめしと浮
よまかひ去霜月より出王の深き恵ミに預りしこと
も悲しかしこを告げ一礼をのべ王子方上官へも教
まく拝礼なし宿所へ帰り再び日本へ帰帆の時をまつ

と来し互のまじハりを忘れ出船の日を待かぬる斯て是
まで逗留中心安くせし知音とりハ互に名残を二町
余ぶてし所の人々まで送りて船にのりて人々さ
ま名残をおしみて又ハ船路の用意とて枇杷葉乳剤
あるひハ水の器にて用る菜蔬煉薬丸子風薬膏薬
血しめ菓子乾漬物火打なる紙扇子筆墨多和紙
子共まで小袖など持来りて思ひ持参り物を目く
土産とせしとなりの焼酎酒肴をたづさへ来り此方どもの
積とるで前後自分の積をとく此にあまる術とするし



日本をゆびざせしハ出帆の日より綰つてなすらんと指一本
差出しけると云るを志らざれバ詞もふくてあたへを乏
るげさうなしこ居る伴よあひくとも私せまら老人の公
づきひをさうし指ろなぐめ抱おこせバ三人の兄弟も今来り
母親をとぶぐさめ丈より十人の者どもも親子に人重なし
殺すべきよ及び水を別子の勝ち才しゝ門口まで老母を送
里ゆしけ時ぎハ正月廿日の船出帆の時あり〱名残の
一杯をのみしける　經しを正月廿日東風よ帆をあけ阿媽港
志綿み酒肴を出し勝ちなせしえ　川口より一里ふりも来らぬ濱より大勢の人
いろく涙高をりしてぞるなり

西山征伐

艮百里よ為て西山国ハ戸数十万有余の城あり安
南国より積数の道し属国にまて先国王の代迄は年
貢を献代をつとめしが年の変し疏さハ王城へ窺ひ党
羅なりし處ふ先王の寵臣令よ依て彼国に来り足仁
心の政で国人を憐け新法をもうけ改革を寛めけれバ
国中こぞつて悦服し呉何までも五代のかはらぬこ
とを中あへり時よ五年目の為り玉様よりて後の事
代を評するあらべ西山国の人民王様へ願書を出し

当代仁政深く国中安堵の声をのべ今文字年の万暦
を仰せ下さるべしと将中殿遠方所の旅意
に任せ当代の国王より慶賀の正副来たりしれば葉
て立てしそく執詞を用ひずしてそのつて成整せり
と悦びけり却て王城までも後の当代の唱は今に至る
然る許は年月の旨国王急病にて崩御あり続て今
の国王代を納め給ひ西山国へも其の趣申来るとなれば将
軍より合有りて一度節の使者を送り次々の年毎
代をかさねれば王城までは幾程遥く国王より再

度拓しなどして返書をも出さずに拒み前後の経緯に時
日を延し彼是半年ばかりも立て西山国は蛮人歩を
まして城を築き国の境を切るのみ自立の志を顕
し日々軍勢の操練をなし安南国をも平呑せんとの企
てこれあるよし王城へ注進ありければ国王も僉議ありてこれ
苦閣のつけたがふごとく彼国征伐の総督方大将一人
擬軍勢催促有ければ王城の大軍此時なりと諸国より
寄集りし勢又国王の勢兵備ふるも京畿五十
又年四月より西山征伐の手始として先鋒凡三百艘斗

但し秋のこと奥にあり　彼地に赴き合戦半ばにして双方討死多く
殊に国王の武器もことごとく其上西山中にて王族より
百里も山東府まで強く征伐を差へ定し十月中旬軍
勢ふたゝび渡帆なるべし右程軍器不残調ひければ翌卯
年三月上旬よりして軍船海上におびたゝしく数十艘の通
日々に出帆なせしと極て多く発向するなり
此一件は人の知る所にて皆世人の能知る所なりしまで事を記
但し近日中　占城　東埔寨　各隣国なり
右安南の属国にて南天竺の内なり此道十一ヶ国中の所なり
隣国より千人斗加勢として来りし人数もおびたゝしく見えて
ことよりはゴンのことごとくのものを多く軍勢の者共にいらざるの
ものを舶にのせやとひ海辺より出し各舶凡三百艘斗
海上に続あり右艘三百人乗りの積りのよし唐人申しく

船

南京船の造り形
帆柱三十六本
大サ東本願寺御堂程有
乗組三百人余　但し羅紗　羊毛　茶　塩　油　其外穀物を積入る也
幟　指物　吹貫　但し五色なり
旗　鎗　数十本建る

弓ハ不残中弓なりまで張し小三郎
引見しるし張切りで候

船三段

下段　弟子大石火矢箇八所　向同八所

中段　弟子中石火矢箇九所　向同九所

上段　鉄炮二十目玉径　弟向十六所　甚小
かぎり有り方八方へ自由に働く車
仕かけある

軍船川口まで小船三千艘にて引出すなり

右の船六百艘積り船を立数百人毎日様へ居しを改く
見物より行しなり

餞別出帆

餞別の品二三をまゐらするなり

居家寶要

百備全書

張太史鑒定 □□

大本
全部一冊

東之戸平写之
安南国まで
源三兵衛餞別

天文地理暦代帝王。九九算法。斤求両法。ダウジノ
百家姓。其外雑字。采彩種々集成ス

扇（あふぎ）

表　垂早なり

絵　山水　条楽ニ人家　〇

裏　細字三十六行字数五百余字

奥書　庚日日右書

翁老先生為清槙拝正

竹庄

扇子数多取寄一々記之

唐紙ニ楷行書ニて太字之　藤家酒肆息總之

太神宮　八幡宮
太明神

公方より下されを書し總め費へし

景興五十六年庚安南国　年十三歳　名ふし

右の書持渡被見せし所
出来よく見事なり

女形絵

壱人立姿

褄模様衣裳帯常なし

頭は櫛あり後は頭巾あり

髷げ

顔は扇の輪かける

壱人窓よりとくと外面詠る衣

鼠色葡萄ぼうし衣裳

二人ともの女さんの傍にあり

上は額あり　愛月とあり

其絵帰帆まくら中人捲め是にあり

幅　弐尺

奥行　壱尺五寸

横　壱尺五寸

竹細工錠前有

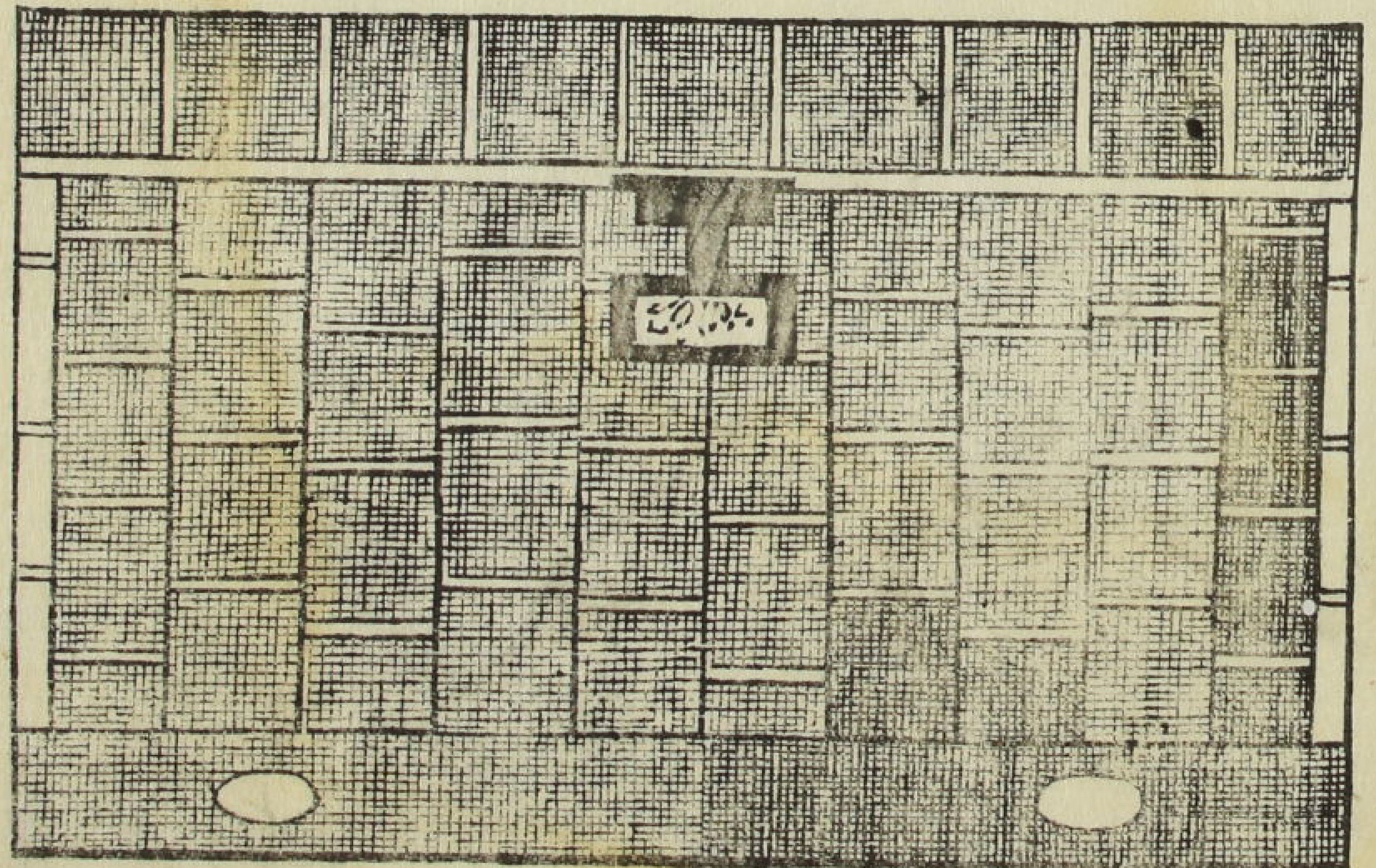
葛籠

四ツ銭別紋中

物入なり

初下より是迄安南国の

始おもなり



阿媽港

四月廿日阿媽港ガボヲの役所に参廿六本の帆桂絨
遂順風よく南風を受文豊ね八日の夕海上に凡六
百里斗北へ走て五月七日阿媽港の湊へ入津し
まう
ゐ手代子出生捕へ住遣なりとてしらべて国王より日本の
役人も来りて上宗門遣の日本人なれバその住居
捨置べきよし左ところ糺ありて手代よりいろく
少しづゝ十方よくれいたる事ども中く和歌カボヲへ
たんくお頼みありバたゞひとつ国王よりかまへどもこそ安南ハ

年生交易の土地ゆゑに安南国王よりの法に出ありしバ
え広東まで来りまでハゆるく船中に遣ひ捨置べしと弦
まいさまの為よて船中に落ちつきありて肉もうまい遣
のまゝ阿生ハ不時ひ事のあるべきとも志るし只天命
に任せるべしとりの扱ひまゝ三度の食物も安南とちが
ひ肉食ありて役中のこふれあしく広東廿の来る
と順風待ごくれおりしひ凡七十日ほど船中に住ひ居
禄く一参りといふ日の相ぶ所を疏ありより外ハ
となく日数立内に此地の何ぞえしあいましきるに

まるきかはり おかしき人物阿蘭陀(おらんだ)人のごとし

阿媽港詞

舩(まるて)　舩頭(かびたん)　黒代(べろうと)　黒坊(くろぼう)

家(ぶらご)　羊(ざう)　鶏(かれぎ)　大(おつちよう)　飯(こめ)　米(あろふす)

喰事(めし)　水(あこ)　肴(べし)　胡椒(ちり)　沙糖(志よう)　猪(やらん)

茶碗(ふららん)　箸(ふこふ)　紙(ゑろん)　火(ぷかく)　竹(への)　頭(かづき)

髪毛(うきらろ)　鼻(なんき)　爪(そとどう)　眉毛(への)　眼(こつまよ)　渡守(とんう)

行(まいく)

右阿媽港詞の大体なる事多きを略し少しぜうの残しるすなり

要害

王城ハ湊より見附の島山を中にはさみ左の旋頭に
宮禁葉まで石垣高く頂上の中段に五重の塔あり臺
見櫓所々にありまた其間一廻りくに石火矢臺又
鉄炮穴数限りなし町ハ禁葉に並らし湊口に高塀
丈余に築石火矢車に乗せ常に軍の備へ有二十八
三十人づゝ鉄炮をかつげ火縄に火を付鐵組との城
外に続きたる山々を巡る事一昼夜に数度なり外湊
へ諸国の商船入来時ハ其よく明貴の合印を立るなり
合印を付ざれバ番見櫓より出玉へ調鉄炮を打掛るなり

十六

但し諸国の商船合印国王より免しある入船の時
王城よりも湊口に至る船番石瀬ハ引あるなり

盆

十人の者始終船中に日を送りたれバ只浜辺にて人々
奴原の太刀と城の外にて城外の山々より見月によぶの
なし諸木に鳴の集るる日本によりして昔のなくさ
ども鳥ハなきさえるや前後七十日たりに一足もあ
たらず阿婦港の町ハ外に丈余の高塀有バ何のものも見かる
ざ郭て七月十五日十六日ハ国中の者皆浜辺に出

大筒を花火とよろこしてあふぐて揺りしく城中より
所々ふのろしのつゞくさ大花火ありまさハ大船何艘と
云ふ数限りもなく一二里づゝ漕ゆき人夫数をもちんたち
くぞもしきをく旗を数たくさき喇叭を鉦幣のごとく捌
簡紙を何色の船にそても焼せば焔を海上の火物との
きなく陸よりハ烽火とあぐる筒音四方よこだまさせ
鳴物の音谷響して初探するよてまらば海陸一度よ
目を驚るかせり折花十五日営る也法より小舟かし漕いで
せば皆をそろき傘さし船端へ来る人あり其傘のけつ

こうなるて町人などのさまざまのよあるべし定て虫
のみなみんと見る向処く江より出来る人も同じ家のうち
かさせへふしんよ思ひ船中のまろるへハ錦色が公家の傘
ハ石羽同しうしへとこそうつし海のうしき濡のあるまし
記のごとくなるう

傘　青絹　萌黄絹　右絹にて張
　　黒絹　黄絹

骨　真鍮にて石附うしく漆塗金具あり

柄

紫檀の類唐木にて造るなり

但し下駄はなし皆くつなり　日よけ皆あり　雨傘皆あり

五月より七月まで日数七十日ばかり船中に逗留ありて

所去六月中広東商船仕出しに乗り十七日出帆して

カボヨより日本漂流人帰帆のことを安南国王よりたの

まれし故具に申送りしければ広東船の船頭に是を受

合十人とも無事に順風に帆をあげ十七日鶏阿媽港の

湊をつゝがなく出船を立て同廿一日広東の川口へ着

それより官人案内して旅宿の方へ上りける

南漂記巻之四終

海上道法凡三百五十里斗なり

南漂記巻之五

廣東州

清朝十五省の内にて大國にて諸侯の城下之の様なり但し方三里王城ハ北京順天府よあり時の年号乾隆六十年よ為るなり此国北極二十一度の所にて福建の西南よ當り海つゞき十二門とも云て十二所の口あり福建より廣東州へ海つゞき右福州へハ五百五十里此地清朝の内にて日本へ通路あり通辞臨詞等ところによる皆何れも通辞をもつて事を役せり日月の名ハ安南国より來同なり涅月又ハ月の大小日本よりハ遠あり氣候ハさしてかはる事なし此人鞭髪にて頭を剃

福田文庫

真中に少し髪を残し首筋には髪を延しある位
高官町人百姓まで小さき頭ばかりの笠のごとき被物
有様くの毛おゝい織物にて上に銀のござりしも縫
甲斐唐木細工との裏は竹のつきれしものかぶり物也
しもは裏衣とも同じ其足すくく上下のものがち首衣
紫袋は上下きみくありと云ど仕立様は飛出襟ゑたる
女は髪もうしろに垂さ上衿をまりつく髷を長かんざし
を指面を粧るもあり衣装は男と違ひ袖ありまそれに
く袖も長かくるなく花葉のもやうん常に裾をたばかりう

しま本は足のくわ小さく甲斐の女と云ど総身寸だけよ
見ゆるはなく小女などは足先をかりしもの流ふ
あり此人は是を纏足といへば女のあし先延ひが下品と云て纏
付も出来ぬと又南清船の国は右の通ともそしからり
しも女風俗安南国よりは勝しく足先小さき也下さ
んものあやうくなく此方どもものこる事はそれからしも
なきことのなり

乾隆六十年卯七月廿一日廣東川口より舩よりして
官人つきそひ申て石平門是ハ城下入口なりの所也安南
西とちうひ町家楼屋とおなじく高郎毎に垣根をかざりて
高き屏おほく棟一揃に揃ひ石道のことく切石を敷町々門
にの外に又一重の塀あり門内に商人の店都をならべ何商
賣にても其々の町所々に限り呉服古物小間物荒物
金道具板類或ハ書店書物墨筆その外穀類なり
商店賣買繁昌の様見へずなかく商ひに諸人群
集り町々通り納屋郎のごとくとりけ出る道ハ石去砂

の様なるなく入口より一里半ほどにて藤岡へ着く
ても路より官人附添ひて私へハ衣服一郎かざりに案内
のことし滞留しける日数多の食物も出し豚日本に替りなく
く川魚其外物類を並び肉食を振舞る事多く代ハ地のも
味噌ハなく日本と生しよりなく味噌汁を啜吸物く
至あしく醤油ハあれど是も塩のからのごとく醤の醤
醴にあり又何ふても味あしく菓も安南ものより風味よ
しとし、など穢國の菓種より多く果日本へ帰朝して
したく十人ども是の国本に堂しりり出身の城ハ代方ど

と旅宿より見物ども只五重の塔斗ハ三里五里四方より
もよく見得ますく二日過三日毎に上官人来りて出立を
旅亭官人門口まで立出る方立寄して宿に至とりし
らしきを組かませしハ禮儀しお見物杯く笑止きこと
こそあれ其後内へ案内に連れ上官人入来れバ諸く辞
義なれしが往礼もつて時紀より係り来れハ官人の貴人
にて人斗按側に控とりワアくと云バ大道を通ひ
行列へよけしハ定てかくよれと云てひやして相望せ
まひにまで廿日斗逗留の内町内へ被見せよと

しがつとふく私なき方出立かかると入込り旅宿
主ハ旅亭人とのこし亜毎日お客をとあバ又其時刻迄
遊びあるさまり伐ひ至て家立よく二階をもあそど
安南にて同じことふく男女こしうけに酒食物酒
盛用度も調へ其暑着をさりがたき時節衣裳寝採
被し居る様を見れバ頭に枕をなし足先にも枕よ
てあたるまゝにとし人上にあしとのせ外事男女の女
子もうりし夜着ふと右のごとく木をよし風ハさそく
頭りしくあるりのまり床ハ板間よりまで図ど枕の際ハ

優無家にもあり其中なれどもさゝかもさらにそれるべしとも
よあり　但し此女へ来りし所を川上見物人多く町役人もこれを詮議して取締せり

花嫁

此国逗留の内向旗家に婚礼あり然るに中華の嫁いり
を見ることよろしく其日を兼待所婚礼三日前には式あり
て一家を附出入の人を呼び三日の間く嫁来る時は蝋燭を
ともし衣つき女能衣裳を着し紅粉を面よりいろどり足
は六寸斗のこまれ細工の沓をはいてかりのきゃくさ先一般
に錦の袋に入し枕をつゞけて女人の女持つゞけて稀なる女手
に箪笥を持兀女等并行側に十女人などつゞけて静にあゆみ絹団
をもちずに来りしが皆どもも穂盃てゝ其よ門口より衆
しれ右の女ども日本人の風俗のかゝりし手目に付し
や行列にもてもなく先に立ち嫁の見えたる門に嫁の荷物
但し婚礼の儀付にかゝりなし後の儀にて来り織物の錦乃
方よりしうけとりたる方へおおせあり
蒲団を重ね家衣裳の箱を奥方へ出し荷物の戸をそろ
く家中の格子をたて次第に錦の女ならぞ入衣裳出来
内玄関前の大門へ来りしに出迎の者あるを挿入れ嫁も秋

くさ〳〵食ふやみの一声を明させ給ひたる其後ひ数
あれ天台のむらさきのとかざり龍は変化総りしく気
量ふかくよく縁ある紹をよみまへい鳥富一たる目もて
にそみて並現く当方より中女色能く宗好之綿布を
添えたるくれ三嫁は一云下孔子の仕方をとる又其おようり王
嫁を詠め未解よもうせざる花嫁を定外あくれど見ん
物せしも濃流人の一波すて見知と去やうたるさしきと
まゝ長の旅路に只一袋とて多く真じけり

墓所蔵

朝より夜明の鐘鳴りに出つ夕刻は鐘の音に無
常を勧じ結び寄せは愁ひある浮世のおもひまてほし
て中華の嫁入にまで真を修ふせしが香吹の日は七
八郎藤家に不幸有る成家に喜びの酒盛藤家に
かふしこれ人を集め称ふるを人のすまはあふれと父系
をれ詠りも相明せば藤家よりも法要を営みたるよく
ろきまくまれしの鐘まさに出て遅き家の命を一廻
足見物せしがおどとなく出家先へ五總香又は去型物

を持歩ゆけば門に続て大なる輿に棺の上へかくる錦を以
にて掛てのせ道々従人多く町内をとほりて 右棺は安置し
と同じ体なりまして細め本の厚さ 町内限りの跡くはれば旅
をすゝむるとてなし
寄宿の付添人は出る輪をのせ行なり又は火葬なる
や但し土葬なるや銘を見ればされば土葬なれども小家葬
にても大なし是より墳下を過ぎ一里斗に墓所あり
其土地中に町斗一方にまたて四方に高き塀ありて代官に
墓所蔵建続きて一ヶ所ハ蔵の戸を平に持主の所名
前を閉じ平生は鍵をおろし死人あれば開きて棒

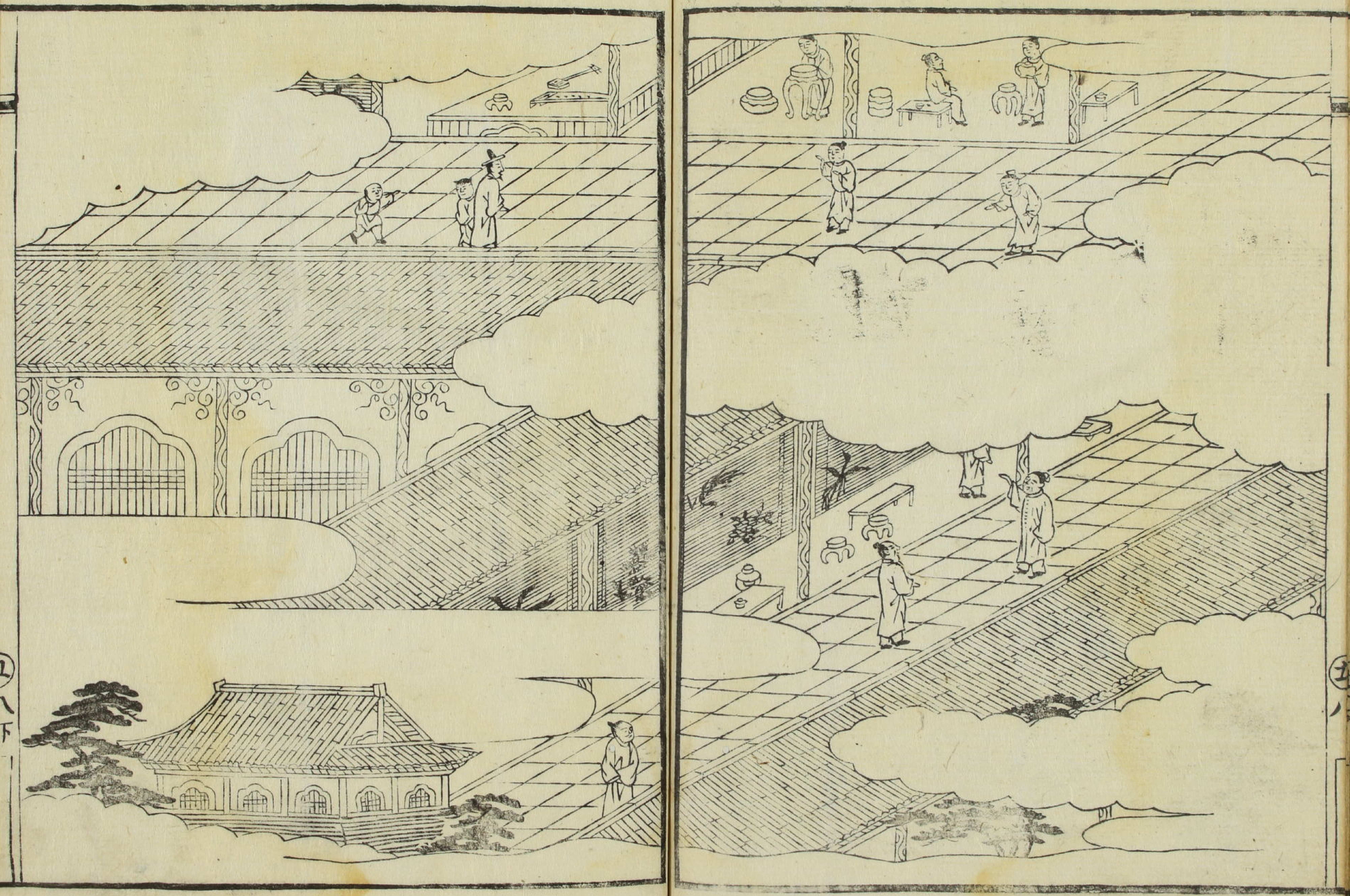
隙をふさぎ戸前を塞ぎ置棺此所一ぱいになれば蔵一ヶ所
にて是下地積ある前の棺の上へ年々年月戒名を書し
其侭後をとざし其前のごとく鍵をおろし従の人は立
去く帰るなり蔵の大小二階ありて多く二間四面三間
四面または身体の分限多人数の家は蔵も十間四面
或は十五間四面ともあり広東嫌外にかようの墓所数十五
六ヶ所ともありされども此蔵の在所は年中臭気甚し
く此蔵の内多く棺の腐朽果し錦も腐ちて蔵の内よりの
しきれば不意に死をうけることあり人に臭気なることは棺の

又田の畦より縁一持ちより莚こそもの數とうけ拵へ並べ
ゐるありよ宮中宮殿の如は一ヶ所別りにありとも安物
借さしゑ風の美事なるありさま

祭禮

廣東城下の祭禮は例年八月六日より同九日まで己月
の間なりけ三里四方の土地よく年々神事所を立て二里
十町にて廻るなり凡十二年目に一度づゝ當番勤ふし
旅宿も當年祭の支度までそうして受くる祭禮は給

こその作りなるありましとふが町々家ごとに肩書ハ乃
くるまを付作日の内ハ売買を休み錦々表より幕をそで
張る床にかくこれハふ棒様をなし表柱ハ毛氈裡々
纐あるひは緞子の類をもって店ハ三方ともに上
よりちまで帽子のすだれよ様々の花鳥の繪出し
とうけふ森のふそこれをるまで玉細工帽子細工のつ
くりのあり大道よハ南方より網を渡し一町限
つまふ數五百斗を断燈を釣るしも上ふ家よハ輪燈燈
百五十あるひハ数百だりつも床より奥まで釣ちへ



小家といへども三十年づゝも用ゐてなし日暮時より
大道の行燈または家内の掛燈燈へ火をてんじる故を
一度にかぎり宵消さへ出らり絵出し而ハ夜露をしのぐ
ことなる人その夜作るとごとく出るかゝやく月風情何ぞたとへ
るものなし また一所でも八万軒もある数をたとへて云
家の内にも三味線あるうちより小詩やうのこゑとうたひ
酒肴の宴を催し宴とりてあそび遊りひは筆をとり詞
よみを綴りつくるまでも旧日にも所内を舞歌暮時より
幾度も見るたびあきる事なくして旅宿へとよる通辞

よつ角の祭礼は何神をまつりしと問はれハ祭神は
関帝勇の祭礼にて毎歳見物衆集中にてハ今年の
祭式に満しぬ所にてかざり方を見るにあらざるもの
と一月だらの通留にて極しき神事にて会されしの程
てあります

中華にて神と云ハ
關帝菩薩　大道公
諸葛武侯　張天師
娘媽神　紅玉の神也　玄冥の形也

て有物

総髪はあしざまにいへどもこつのごくゆるしたる室
なし喰ふべも食とかしくむかしゆかしき遥
ひとと生じ中華も日本も是等の徒然人とこの数
としまと廣東にある円衲支那に男の脳天を剃
ざりもせ女帯とそし老髪までうしろへ髪とさば
し中二人家も有唐風の人織物の着物の裾たがく
まんろく一人の供を連東より西へ通ると表向すんし衝
此後の風俗に珍敷裃格好何人なるやと通辞にとふ

ここは六月本の山伏と同じことなく行者なら此山巫
女覡男山伏のごとくさの其の外大なるし陰陽家抗つき訛
まうのみどこに歩み布施とをしい世渡りの世業くなせ其
なるは此まちも可しぬるすと知るはけかりてゐるも彼等
を頼くるのすじ八卦医者の売薬方角也へ當るまでみくの
金銭をとしうるの法はなるし古来しとせず唐も日本
も古今の浮世なる在りてことぶれの文神変の也る途を立ふ
平生をちがひ立売商ひも其体を磨くと隠し遊
破きし先と見てまさしくひむしろとかぶりゐるもあり

しぐらちんだの分てこまの近てに余ことぞらいさうひたすら
せし様ハ何ともかまはぬ不埓者の風呂とおもひける
家々より捨てさるを下女下男にまかせ其つきりし流
町中へたれこまず只あまり泡ありまるを直に待身なり
又藤宿の裏通りに流れ清き小川あり武蔵野の
裏へ玉川上水堀しるに四方に増るの流廿里に乃
女髪を乱し何やら行もなきさるなと歯黒ありく
猿るくかしげつらくと川ぶちへたれ頭より水を浴
そらうして此方を向きゆらくと気ひろき人に合せ指さす扱ハ

粗乳の人をよせつくしあまりて内川よりよりまさりくる溜り
しあつき結ひし女気の形もなき也と遊の身の其楼
大きく又平生大道の軒下にいて濁蜜となるとて一町
内に二三ヶ所げ也只何方の塀ぎわまでも板に書
し物を持主人ぞすなり則ち其人風呂家かくげし男
後に批所の行場あとなるせい行通ふ人もなくして立
留り板のよへおりかくに積と並材も前の主人三ツ
の畳を投かくり積置となし此中次第に長ずれど
残とよくせしもの一方にある家の風呂桶かくげし男ならへ

もし頃まで右の男より來しく殘斎ハ常ととき
探ねみしかつてみしかりけり日く所にて發
度くらふ湯のをく朝より宮るまでむかうする後すらふ
されの多くし是も此本までの一第ふり此國よあるてくるも
其一月よ任りし所上官人來く見そそる此本の事ア
渡しるこ支よりめでく用意なとかしかり
然て清朝の詞ハ和板よあり唐話纂要と云本の一之之之
唐音れよりて此本後よろしく東とりしくへ之ハ
廣東まてをさ家の人より源こ之
銭部の写し本一冊斗を余墨て

乾隆乙酉秋重鐫

文昌孝經　平湖西門內　文昌閣藏板

右之通戸平ニあり　但し序文五枚一丁　完則之丁數五十丁　囯本

初丁
文昌孝經

開經偈

浩浩紫宸天 〻〻〻〻

〻〻〻〻 右三行在

眞君曰

乾爲大父。坤爲大母。〻〻〻

船路

乾隆六十年八月十三日廣東の湊より河口に至る是より清朝左甫まで河路也 但し海へつゞきし大川也 小き船数多付添ふ 船ハ南京船の通るべくの程に帆をあげ送官人

廣東護送官姓注名樹本

同勢数多水主に至るまで厳重にして漂流のもの都合九人 但し安南国より廣東まで人数十八人なれど安南に二日まへ清の国へ出ね果九人となりしなり 此日晴天にて殊に追風よくあやうくも日本の地へ近寄る事浪の音聞ゆるも知らず清しく出て果然一の崎に

たゞ思ひ出し浮世ばなしさまざまに嫌悲のことぐくそろはりて又ど帰るハ志をさる兄弟の身なるべし者ハ是非をあくゞ神をもしどのども律儀の思ひまそ深く日本の地へ引よせるまゝ再び古郷へ父母妻子にまみるまで長の月日の浮しさと咄し結果し我の心中を思ひ今日毎にあまゝてハ只ゝの事より振舞船軍の食物船ハ豆腐また鯉の漉煮と菜をまし豊とて夕飯より鶏卵の類をとらへて食用とし彼是国風まんよく出帆二日目にコンサイと云城下の湊と通し

しかも老たるも若きも男なり女は一人もなく川獺なり
並ぶらしび見え君が集りてしと門もさしたる山のごとく
集りしを此方よりも延上りて見ゆる丸の方に城下見え
まくて手前に五重塔見え船は次第に遠ざかり往跡先三里
斗の間川獺の手よりも寝そべり林にて枝をたてて宮の後
は百千万の鳥の声はたゞ一面にぞひゞきて浦は此所と宗
る事ばかりさうさうに多くの白鷺枝々に留り下におり
啼さるもあり向ふとしても手前とみても白がしまを斗
みくまくは一羽もなく奇麗にておりひまより船を進

風に吹かれしが二日毎に一ヶ国二ヶ国づゝも千里より城下
を離れ手前の所に五重塔有左右の川口までに城数
四千七八ヶ所ともいふに何れの地にもいへども川より中へ一里
又は二里ばかりも三里とも向ふは目に及ばぬ遠方より
よくみゆるも五重塔ありて川續きに並岸ともも仏寺目の
間村に立ちありて所々にその見物人さるゝ羅漢のごとくされ
どこも女は何方にても一人も出でず去歳十二三日目に ジツコン
となる此川上へ此所より官人請取り陸へ上り暫見合
ある間時刻八つ過とおり法沖の方より津浪のごとく一

又ハ六尺も水ふき塔の礎際へおよするまでおりひびけ
なきこそ乱伽藍し急ぎ逃んとうけ出せバ水又せ勢く
よ皆び留め公取ハ大海より満塩の時ハ毎日一度ツヽ水り
のくあり今日の塩時も刻限と考へ入津せし所を難な
まと夫れしの内現身に塩も引かしきれより日本の海上
かくれみそきつ止もそ始ハ大きに驚きしとやけりまさく
太川より揖へ流る枝川ハの幅一町斗よして川上［ジツコン］
の町へ渡し常に小船の往来せげし公田百郷ある大川と
堺下の東より五重塔有公下に百軒ばかりの一村ハ塔と云の

人家くの日く当時よ塩へ上りの一里目二里目よ四五へ町
焼せ又張りて鶏とくのきよあり是ハ海上大川なりの夜の月
当とまる見焼也云清朝まそ塔の高き物［ジツコン］の績
くものなく四斗又斗もあるべし日本天王寺の塔四つか
けるとも是ハ王城よても塔ハ是程よれなき哉下官人
味しよりの公村へ堺下より多くの牛車どりまり運送の不
と積へ［ジツコン］の町へ日く西さと日本伽是の牛車よかしも
遠ふるまし都て官人の気風まて当時よ堺下繁栄
是日町筋と通致しり広東よ同じ繁華の地とみ

一商人の住居豊かにして諸代呂物を店ごとにかざり建つ
ゞけし家ハ何程と云かぎりもなき程軒ハ四里斗より
八ッ時まで一筋に通りしに城下とおもハれ町と並
ちる事凡六十町も有るみゆ 船ハ余計より毎日国々
と左に見 扨しま船より川口と遠出口の方へ船の名の拓川
て同色場のごとく九人の者ハ拾しより日 此所へ集りまて人足ども着文官所有
み物の何らも日本にかはることなし 右に見て小路坂より
四十二日目左甫の川口へ入りたりき

左甫

廣東より船路凡二月斗にして卯十二月三日左甫の
川口へ着 此國浙江の寧波府といふ唐の代明州の津と云し所
諸国より日本へ渡海船のこらず此所より出し北極出地三十一度之中華第一の湊にして
此所にて役船改なり 扨て船中より向ふを見れバ
此地の官人役所の役所にて此所にも九人有 其外上下三口
十人斗を付けてこれ護送官ハ此方并九人を右連陸へあが
る所の官人へ挨拶有て後めいめいを駕籠に乗せ下官人
先に立ていこありて引續て護送官通辞ともに下官にさる
まで行列次第を正し城下の所二里ばかりを通り役塚總
門の手前に行 側中町に三日程の明屋敷有此所へ宿りて

入ば則旅館のよしや沐浴休足爲と食事を調へ
官人ハ彼是の後二階へ引移らしむ此二階ハ三方遙に大海を見晴絶
景の旅館なり此地ハ清朝の内乍浦と云城下にて
乍浦の城ハ西表にして平城なれども三方の石垣ハ大河試
取巻一方ハ海へ築出し一方平地にして内に五重塔あり
大道より見る時ハ城中にて高く又塔ハ見階より二
里斗にして諸國の商船此所に碇をおろし問屋新哉
なるべて日々荷物の水揚ありて満郷小路ハ市日のごとく安
南河媽港廣東より小國とハいへど皆家建並すべて朝ハ

未明より日の暮るゝまで家々に陸運運送の荷物とし
ら又返々小舟にのせ大船へ持はこぶ日々出舟なきもあり
入津あり船も引違ひて出る此地の繁昌我國の浪華に異ならず
扨我人の着ハ旅館に有て三日目に本府の官人来り船着
の書を改め官位に披露して諸入用の公官所より渡され
是より稀ぐる事なし此よりハ長崎よ日を送りなり何の
但松の町屋舗ハ家々より清朝の地へ漂流人までの手
くより何事も此地に逗留中右の旅館に渡事定て
なり屋鋪に永くとゞまるくして上表を守ね候

これまで何ひとつ不自由なく六年已前日本松前漂流人
も此度まゐしや書付差し落書様にありしとき
よし納まり新しく時候も宜しく家宅より北東の
湯によりて二年餘り住て此所まで記録と覚えたる
着せし時の衣服を此に着し官人まで取上げ
此度ある着類ハ何が能ると絹しき縁へ數人ハ縁人の
たつ細かなちりめん縮子の此外をも着せしとのこと
のつけ仕立るけの縁までハ見事なる其布子
下さること中々其ハ其頃此の旦月七つ時分まで

日本仕立になせし新薮布子を長人前に二つづゝ都合數
十八宮人へ持せ来る蒲団も明日来べしとゆゑ左に其文
次の日またも縁の入し新薮ふとんを二つめて渡し
宮もと染上古布子蒲団の數々まで仕立つあるとて其で
此國盤華の地とへるも折量せらるまでに折て上宮中宮
の人なる六人或ハ七八人づゝ旅館へまゐり通辯とつて何
角尋ねる事ハ常に便り常せし勝指に似たる紋の柄まで
よろしくとあり三の方とよく向き達さ處にもし合点行く事
無限のことも不審におもひ頻りて訊ねまで尋ねられハ

一通りに指向ひ日本人参詣して読経をせんとする納経を
まへしる趣く仕舞ふるくてと一節なしよりるよ仏し宿所
まてもやはり彼しの宿は役舎たるはむかふのしたれおりし此所へは只咄しする事なく取らくの外ありおりて此地に十日だらり逗
留中瀬脇の寺内に芝居ありて八度まで見物に出あり
度毎に役々九人ともかかる衣裳まで行ふ宿人へ度三人づつ因合
せり彼是君月六日まで此地にありて翌七日元の唐船に
乗り護送官通辞と下官迄おくらひ海上三百十日に再
ひ日本紀元の国へ入津なしけるは誠に我国の宗風和漢迄
及ふる事に従ひ帰せしは偏に神国の着明ともいふべきの一、

かくと咄しの伝書なしなり

芝居

瀬口より一町斗北の寺内に芝居あり其建方は寺と小
屋の中へ入てあかる様に板がこひをなし木戸ありて内
三方におしまわし桟敷をつけ舞台は本堂より向
見物し尤座は本堂の掛なり常芝居はなく折日々
寺こまて勤るよし此方ども芝居は行ばいつも南の方に桟
敷三間斗別に座ありて五十箱に備を見せ五十間もある

たるみこ足附の木の臺と齒し其上に種々菓子砂糖漬まんぢうあげもの菓物なるる近右甚臺の上へならべ祝日親類是を結臺時ハ別に食用となし菓子ある沢山あまる故のこらしを紙に包持帰り宿所にて日々樂しなり見物人役者をたゞ其方ともと孫々迄もそろく方りし八度まて見物せしるのも孫福持帰りし芝居ず興材繪本の沈第一く沢によるとなり

乾隆六十年十月芝居
日本寛政七卯年ニ當

大清乍甫湊口寺内芝居表
第二 かんだん繪本

初段　黒風大王送子

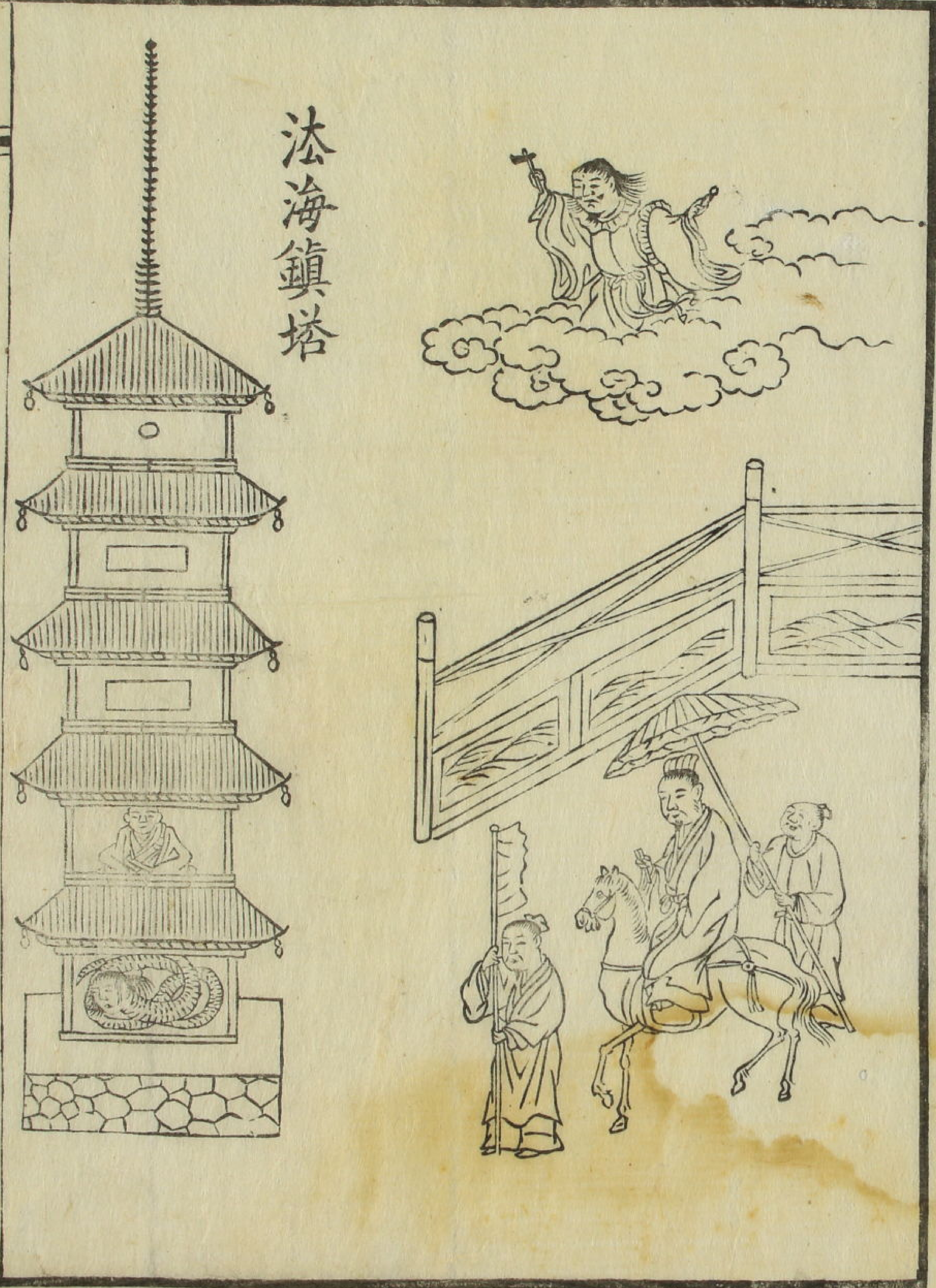
二段　白娘々吊打茅山道

三段 白娘々水湧

四段 金山聞法

五段 狀元挂街

同續 白狀元祭塔



六段　白狀元榮歸大團圓